

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第3集

栗毛坂遺跡群

SHI
芝

BA

MA
間

長野県佐久市岩村田芝間遺跡発掘調査報告書

1986

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

例 言

- 1 本書は、昭和60年度市道芝間線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 調査委託者 佐久市土木課
- 3 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
- 4 発掘調査所在地番 栗毛坂遺跡群芝間遺跡
佐久市大字岩村田字東芝間3749-3, 3875-2, 3876-2・3, 3878-7・8, 3879-2,
3902-2, 3913-3, 3914-2, 3915-2, 3918-4・5他
- 5 調査期間及び面積 昭和60年10月14日～11月15日・昭和61年4月1日～11月29日 1217.5m²
- 6 調査団の構成

事務局

佐久埋蔵文化財調査センター

所 長 木内 捷 (昭和60年度)

西沢 正巳 (昭和61年度)

庶務係主任 畠山 俊彦

庶 務 係 高橋 純子

調査団

団 長 黒岩 忠男 (佐久考古学会副会長)

調査指導者 林 幸彦 (佐久市教育委員会)

調査担当者 高村 博文 (佐久埋蔵文化財調査センター調査係主任)

調 査 主 任 三石 宗一 (同 上 調査係)

調査副主任 小山 岳夫 (同 上 調査係)

調 査 員 大井 今朝太、羽毛田 伸博、三石 延雄 (以上佐久考古学会員)。

調査補助員 橋詰 信子、篠原 浩江。

発掘協力者 浅沼ノブ江、細萱ミスズ、和久井義雄 (佐久考古学会員)。

(五十音順)

整理協力者 浅沼ノブ江、井出みづほ、遠藤しづか、須藤久米子、並木ことみ、

(五十音順) 橋詰けさよ、平林美津江、細萱ミスズ、柳沢ひろ子。

炭化米鑑定 氏原 暉男 (信州大学教授)

地形・地質・石質指導 白倉 盛男 (佐久考古学会副会長)

遺物写真 畠山 俊彦

- 7 本書の編集は、高村・三石が行い、執筆は第II章第1節栗毛坂遺跡群付近の自然環境を白倉盛男が、第2節遺跡の歴史的環境を黒岩忠男が担当し、他の章については、高村博文、三石宗一、羽毛田伸博が、それぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。
- 8 本書及び芝間遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、地権者代表浅沼儀雄氏を初め白井安興氏、赤沢末次郎氏、大塚里子氏、白井清済氏他、地元の方々には、発掘調査中、数々のご協力およびご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

会田 進、岩崎 卓也、臼田 武正、堤 隆、花岡 弘、福島 邦男、前原 豊、百瀬 長秀。
(敬称略五十音順)

凡 例

- 1 本書は、事業年度等の関係から限定された期間内での、迅速な刊行を基本的編集方針とし、調査により検出された遺構、遺物の資料をできるだけ多く図化し、また、最大限分かりやすく記録することに努めて作成した。
- 2 竪穴住居址（以下、本文中においても特別な場合を除いて住居址とする。）の記述については、検出位置⇨検出層序⇨重複関係⇨平面形態⇨覆土⇨壁（壁溝を含む）⇨床面⇨柱穴⇨カマド（位置→残存状況→平面形態→層位→構材→その他）⇨その他の付属施設⇨遺物の出土状況⇨その他の観察事項の順に記載し、他の遺構についても基本的に住居址の記載順序を踏襲した。

3 遺構の略称

竪穴住居址⇨住、土坑⇨D、溝状遺構⇨M

- 4 水系レベルについては、各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。

5 挿 図

- 1) 重複遺構については、上端のみを実線で表示した。

2) 縮 尺

竪穴住居址・溝状遺構→ $\frac{1}{80}$ 、カマド→ $\frac{1}{30}$ 、土坑→ $\frac{1}{60}$ 、土器→ $\frac{1}{4}$

写真図版中の土器の縮尺についても、上記に準拠する。

- 3) 遺構・遺物実測図に用いたスクリントーンは、下記の内容の表現である。

遺構実測図

地 山



カマド



焼 土



遺物実測図

土器器内面黒色研磨



須恵器断面



目 次

例 言

凡 例

第I章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至る動機…………… 1

第2節 調査日誌…………… 1

第II章 遺跡の環境

第1節 栗毛坂遺跡群付近の自然環境（地形と地質）…………… 2

第2節 遺跡の歴史的環境…………… 4

第III章 基本層序及び概要

第1節 基本層序…………… 6

第2節 検出遺構・遺物の概要…………… 7

第IV章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址…………… 11

1) 第1号住居址…………… 11 2) 第2号住居址…………… 17

3) 第3号住居址…………… 20 4) 第4号住居址…………… 24

第2節 特殊遺構…………… 29

1) 第1号特殊遺構…………… 29

第3節 竪穴状遺構…………… 32

1) 第1号竪穴状遺構…………… 32

第4節 土 坑…………… 33

第5節 溝状遺構…………… 36

第6節 ピット群及び区出土遺物…………… 38

1) ピット群…………… 38 2) 区出土遺物…………… 38

第V章 調査のまとめ

第1節 遺 構…………… 41

第2節 遺 物…………… 42

引用参考文献

付 編

後 記

挿 図 目 次

第1図	栗毛坂遺跡群芝間遺跡の位置	1	第19図	第4号住居址出土鉄器実測図	28
第2図	岩村田町北部湯川谷地質断面図	3	第20図	第1号特殊遺構実測図	29
第3図	周辺遺跡分布図	5	第21図	第1号特殊遺構出土土器実測図	31
第4図	芝間遺跡層序模式図	6	第22図	第1号特殊遺構出土鉄器実測図	31
第5図	芝間遺跡の地形及び発掘区設定図	8	第23図	第1号竪穴状遺構実測図	32
第6図	芝間遺跡遺構全体図	9	第24図	第1号竪穴状遺構出土土器実測図	33
第7図	第1号住居址実測図	12	第25図	第1～4号土坑実測図	34
第8図	第1号住居址カマド実測図	13	第26図	第5号土坑実測図	35
第9図	第1号住居址出土土器・白玉実測図	16	第27図	第3号土坑出土土器実測図	35
第10図	第2号住居址実測図	18	第28図	第1・2号溝状遺構実測図	36
第11図	第2号住居址カマド実測図	18	第29図	第3号溝状遺構実測図	36
第12図	第2号住居址出土土器実測図	19	第30図	第4・5・6号溝状遺構実測図	37
第13図	第3号住居址実測図	20	第31図	第6号溝状遺構出土土器実測図	38
第14図	第3号住居址カマド実測図	21	第32図	第5号溝状遺構出土土器実測図	38
第15図	第3号住居址出土土器実測図	23	第33図	ピット群実測図	39
第16図	第4号住居址実測図	25	第34図	区出土土器実測図及び拓影図	39
第17図	第4号住居址カマド実測図	26	第35図	区出土土器実測図	39
第18図	第4号住居址出土土器実測図	27			

付 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	5	第7表	第1号竪穴状遺構出土土器観察表	33
第2表	第1号住居址出土土器観察表	17	第8表	第3号土坑出土土器観察表	35
第3表	第2号住居址出土土器観察表	19	第9表	第6号溝状遺構出土土器観察表	38
第4表	第3号住居址出土土器観察表	24	第10表	L区出土土器観察表	39
第5表	第4号住居址出土土器観察表	28	第11表	住居址一覧表	41
第6表	第1号特殊遺構出土土器観察表	30			

写 真 図 版 目 次

図版 一	栗毛坂遺跡群芝間遺跡付近航空写真	5	第3号住居址	
図版 二	1・2 芝間遺跡遠景		図版 七	1 第4号住居址
図版 三	1 第1号住居址			2 第4号住居址カマド
	2・3 第1号住居址カマド			3～5 第4号住居址遺物出土状況
	4・5 第1号住居址遺物出土状況		図版 八	1 第1号特殊遺構
図版 四	1・2 第1号住居址遺物出土状況			2 第1号特殊遺構炭化物出土状況
	3 第2号住居址			3 第1号特殊遺構遺物出土状況
	4 第2号住居址カマド			4 第1号竪穴状遺構
	5 第2号住居址遺物出土状況			5・6 第1号竪穴状遺構遺物出土状況
図版 五	1 第3号住居址		図版 九	1 第3号溝状遺構
	2～5 第3号住居址カマド			2 第2号土坑
図版 六	1 第3号住居址カマド			3 第3号土坑
	2～4 第3号住居址遺物出土状況			4 第3号土坑遺物出土状況

- | | | | | | |
|------|------|------------------|------|-----|--------------|
| | 5 | 第4号土坑 | | 5・6 | 第1号竪穴状遺構出土土器 |
| | 6 | 第5号土坑 | | 7 | 第3号土坑出土土器 |
| | 7 | 第1号竪穴状遺構・第2～5号土坑 | | 8・9 | 第4号住居址出土鉄器 |
| 図版十 | 1 | E・F区全景 | | 10 | 第1号特殊遺構出土土器 |
| | 2 | G・H・I区全景 | 図版十四 | 1 | 第1号住居址出土白玉 |
| 図版十一 | 1～7 | 第1号住居址出土土器 | | 2 | 芝間遺跡出土打製石斧 |
| 図版十二 | 1 | 第2号住居址出土土器 | | 3 | 第3号住居址出土墨書土器 |
| | 2～8 | 第3号住居址出土土器 | | 4 | 第4号住居址出土墨書土器 |
| | 9・10 | 第4号住居址出土土器 | 図版十五 | 1～4 | 発掘調査スナップ |
| 図版十三 | 1～4 | 第4号住居址出土土器 | | 5 | 芝間遺跡発掘調査団 |

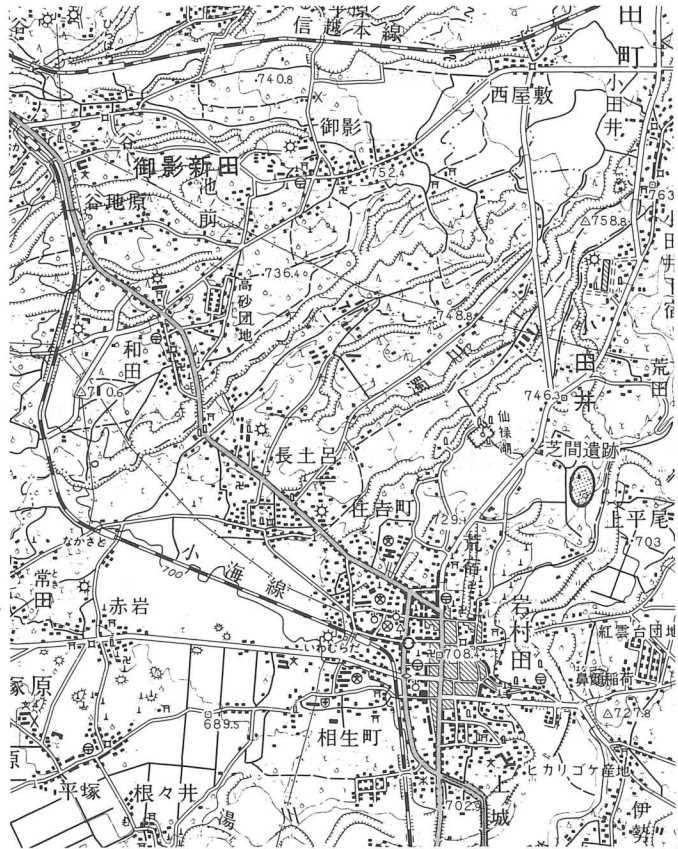
第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至る動機

芝間遺跡は、湯川の右岸にあり、田切地形の台地の東端部に位置し、標高は、733～737mを計測し、湯川河床からの比高差は、およそ30mをはかる。栗毛坂遺跡群は佐久市遺跡詳細分布調査によって、弥生時代から平安時代の遺跡の存在が予想されていた。

今回、佐久市土木課が行う昭和60年度市道芝間線道路改良事業として、本遺跡を南北に縦断している市道の拡幅工事に先だち、1217.5㎡について事前に調査し記録保存する必要性が生じた。

そこで、佐久市教育委員会から委託をうけた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第 1 図 栗毛坂遺跡群芝間遺跡の位置
(1 : 50,000 国土地理院地形図による)

第 2 節 調査日誌

本遺跡の調査は、リンゴの栽培地であることを考慮して、北区・南区の二地区に分けて実施することになった。また、発掘区の幅が約 5 m であるため、グリッドの設定は行わず、A～D 区は幅杭を用いて各区を設定し、E 区より北側は、遺構の分布が濃いと思われるため、10m 間隔に N 区まで各区を設定して調査を行なった。

10月14日（月）

機材搬入、テント設営を行う。

10月15日（火）・16日（水）

南区を北側より重機により表土削平作業を行い、併行して、プラン確認作業を実施する。

10月17日（木）～25日（金）

プラン確認作業により検出された遺構の掘り下げ作業を行う。実測図作成、写真撮影は随時行う。

10月25日（金）・26日（土）

最初の予定より、南区を延長することになり、調査済区間を埋め戻した後、E区、F区、G区の表土削平作業を行う。

10月28日（月）

検出された住居址1棟の掘り下げ、実測

作業、写真撮影を行いE～G区間の調査を終了する。

10月29日（火）～11月2日（土）

E～G区間の埋め戻しを行った後、北側（N区）から重機により表土削平作業を行い、同時にプラン確認作業を実施する。廃土はダンプにて運搬する。

11月5日（火）～14日（木）

プラン確認作業により、重複関係の確認された遺構から覆土の掘り下げ作業を行う。実測作業、写真撮影は随時行う。

11月15日（金）

全景写真、遠景写真の撮影、機材の撤収を行い、芝間遺跡の発掘調査を完了する。

昭和61年4月1日(火)～11月29日(土) 報告書作成作業を行い全調査を完了する。（三石）

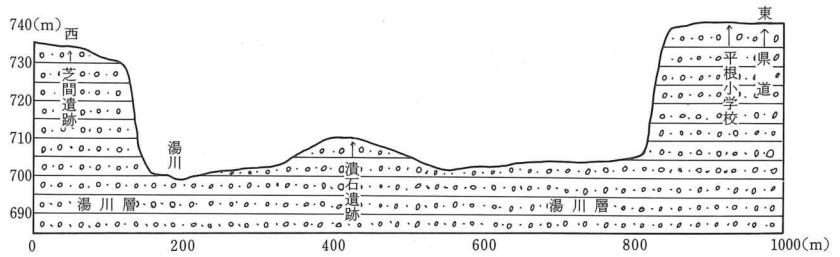
第II章 遺跡の環境

第1節 栗毛坂遺跡群付近の自然環境（地形と地質）

浅間火山南東斜面標高1,200m附近の千ヶ滝から発源する湯川は南流して、軽井沢町油井部落で南軽井沢から西流してくる泥川を合流して、流路を南西方向に変え小支流を合わせて御代田町を流下して佐久市に流入している。この油井部落以西の佐久市に入るまでの湯川の流路が南東方向、上信国境の妙義荒船佐久高原国定公園となっている佐久山地と浅間火山堆積平地の境界線にあたり、深い浸蝕谷を形成し、河流は極端な蛇行流をなしている。この地形を利用して作られたのが湯川ダムである。

この湯川も佐久市内に入ると横根付近からようやく谷幅を増し、兩岸にわずかな河岸段丘の発達も見られる。この付近でも地盤の隆起運動の結果と見られる河床の下方浸蝕ががはげしく流路は蛇行し、河流の側面攻撃で高い断崖を作り、反対面は第一段丘を形成し水田が拓かれている。

栗毛坂遺跡群は、仙緑湖と平根小学校を東西一直線に結ぶ直線上の湯川右岸段丘上標高733m～737mの果樹園地帯である。河床面は698mで



第2図 岩村田町北部湯川谷地質断面図

あるので35mの高度差は浸蝕急斜面となっている。

佐久市岩村田・御代田町の佐久平最北端平坦面は、湯川のほかに浅間山裾野1,000m付近からの自然湧水濁川・湧玉川・久保沢川、用水では御影新田用水・千ヶ滝用水等に恵まれ、また、新期火山山麓の特殊地形“田切地形”の発達も著しく地下水の湧出も多く米作適地として早くから拓かれた水田地帯である。軽井沢に次ぐ高原盆地であるが夏季の晴天日が多く、従って日照時間累計年2,500時間を越え、昼夜の温度差、用水の安定、一毛作などの条件が重なって稲作反収は全国でも高い水準にある。

地質学的に見ると佐久平北半旧北佐久分千曲川右岸では、全て浅間火山の噴出堆積地層で覆われていて他の地層を見ることは出来ない。

火山国日本の最も若い浅間火山は、三重式コニーデ活火山で現在も噴火活動を続けているA級火山である。その第一次黒斑火山は噴火口径4Km、高さ現在より400m余高い3,000m級の大規模なものであったが水蒸気爆発により山体を破壊し、大熱泥流を佐久市中佐都付近まで流出し塚原泥流の流れ山を形成した。その後も軽石流・火砕流の大噴出を繰返したが、最初の軽石流が最大の分布を示し浅間山麓一带に広く厚く浮石火山灰層を堆積している。東は軽井沢町千ヶ滝から西は小諸市懐古園付近、南は佐久市中込原まで浅間火山の基盤層のようにになっている。本質溶岩は含まず、浮石・火山砂・火山灰を主とした空中堆積層が主で一部水中沈澱層もある。佐久市内は湯川沿岸に水中堆積層として全面的に分布し、湯川層と命名されている。未分解の若い堆積であるため水蝕抵抗力が弱く至る所に“田切地形”を作っている。

栗毛坂遺跡群はその中心部に当り、湯川の谷も大観すれば“大田切”の一つとも考えられ、この付近には大小の田切りが浅間山火口を中心として放射状に無数存在している。芝間遺跡の現在の地表面では、耕地化整地で明らかでないが詳細に観察すれば凹地が続き、発掘の際に黑色土の落ち込みなどで、田切りの分布が確認できた。岩村田には湯川と平行する凹地の連続が数条発見され、現在は用水路がその中心を流れ、大井城（王城・石並城・黒岩城）の築城の際に、この田切りと塚原泥流の地形を巧みに活用したものようである。 (白倉盛男)

第2節 遺跡の歴史的環境

芝間遺跡は、田切地形の台上湯川右岸東端部に位置し栗毛坂遺跡群に属し所在する。標高733m～737m、湯川河床から比高差は、およそ35mを測る。

佐久平の北東部、湯川流域は、浅間火山の南麓特有の田切地形を呈し、その台上には遺跡の分布が濃密であり著名の遺跡も数多く点在している。佐久市遺跡詳細分布調査によると、芝間遺跡周辺約1Km²以内に芝間遺跡(1)・栗毛坂遺跡群(2)・鶉縄沢端一里塚(3)・跡坂遺跡群(4)・からむし古墳(5)・漬石遺跡(6)・漬石古墳(7)・腰巻遺跡(8)・西大久保遺跡群(9)・棧敷遺跡(10)・上小平遺跡(11)・下小平遺跡(12)・黒岩城址(13)・王城址(14)・石並城址(15)・岩村田遺跡群(16)・上岩子遺跡(17)・西赤座遺跡(18)・中久保田遺跡(19)・枇杷坂遺跡群(20)・下蟹沢遺跡(21)・新城遺跡(22)・曾根城遺跡(23)・長土呂遺跡群(24)・芝宮遺跡群(25)等25を数える遺跡群・遺跡が存在し、縄文時代から中世に至る遺物が検出されているが、発掘調査により確認された遺跡は数少ない現状である。

これらの遺跡を湯川流域沿岸に限り時代別に概観すると、縄文時代の遺跡は下小平遺跡(12)が昭和55年度の発掘調査により中期後半の堀の内式・加曾利B式の土器等を、上の城遺跡で昭和48年度発掘により加曾利E式土器、芝間遺跡の直ぐ北の柳田遺跡で早期の土坑・土器片を昭和58年度の調査で検出しているが、全体として縄文時代の遺跡の分布は希薄ではないかと推察される。

弥生時代に入ると遺跡は、急激に増加し、特に北西久保遺跡では昭和57年度と昭和60年度の発掘で93棟の中期住居址を、西八日町遺跡で昭和58年度発掘により6棟の住居址が検出されている。後期になると北一本柳遺跡で昭和47年度の発掘により7棟、下小平遺跡で昭和55年度の発掘により5棟の住居址と方形周溝墓を、北西久保では33棟の住居址が検出された。上直路遺跡では昭和60年度に住居址1棟と銅釧15個の検出をみ、岩村田周辺は弥生時代における重要な文化圏ではなかったかと推測される。

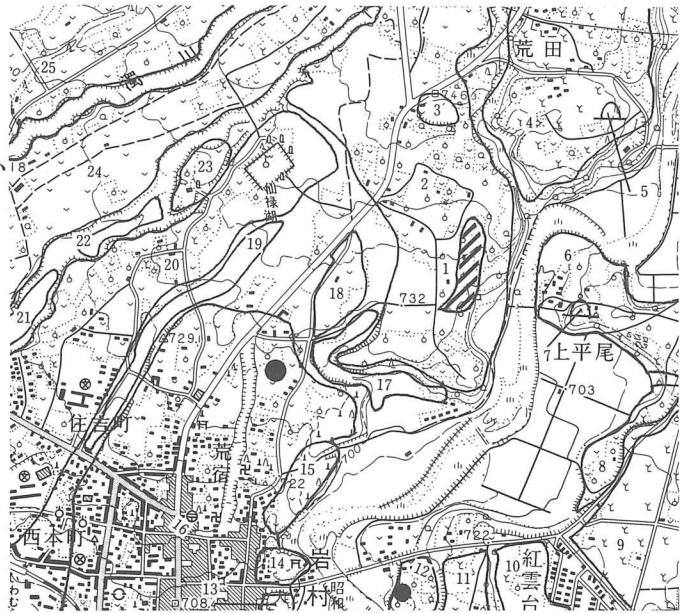
古墳時代になると下小平遺跡で方形周溝墓、北西久保遺跡では5棟の住居址と古墳址2基・周遑15基が検出されている。さらに、上ノ城遺跡で昭和48年度の発掘で15棟の住居址、西八日町遺跡で49棟の住居址を、下小平遺跡は1棟の住居址、東一本柳遺跡では昭和43年度の発掘で住居址5棟を検出している。

平安時代では、北一本柳遺跡で昭和47年度発掘により10棟の住居址が検出され、弥生時代中期から平安時代の竪穴住居址の超過密地域として注目されている。また、中世では石並城・王城・黒岩城から成る大井城が所在し、その北部には鍛冶久保の小字が現在する。四鄰譚藪にも「此辺むかし鍛冶多し」とあり、鍛冶師の集落があった伝説もある。昭和59年度に黒岩城跡の発掘調査

が行われ、室町時代の堅穴状遺構53基を中心に多数の遺構が検出されている。

芝間遺跡の近くに中山道が通り、その所産である鵜縄沢端一里塚も現存するため、本遺跡は縄文時代から近世までの長期にわたる遺構・遺物の存在が予想される複合遺跡といえよう。

(黒岩忠男)



第3図 周辺遺跡分布図

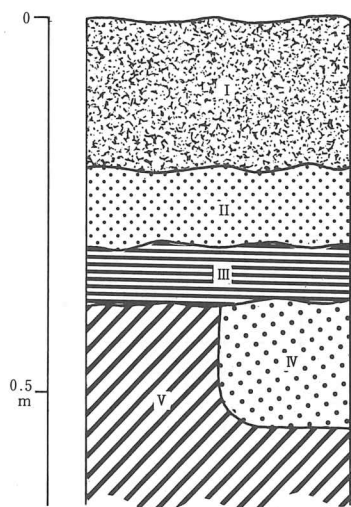
第1表 周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺 跡 名	所 在 地	立地	時 代					備 考	
					縄	弥	古	奈	平		中
1		芝 間 遺 跡	岩村田字東芝間	台地			○		○	○	本調査
2	10	栗毛坂遺跡群	小田井字笹沢前藤部 岩村田字東赤座他	〃		○	○	○	○		
3	16	鵜縄澤端一里塚	岩村田字鵜縄澤端	〃							近世
4	11	跡坂遺跡群	小田井字皎月他	〃		○	○	○	○		
5	15	からむし古墳	横根字東海老873	〃			○				
6	53	潰石遺跡	上平尾字潰石・中川原他	〃		○	○	○	○	○	
7	54	潰石古墳	上平尾字潰石559-6	〃			○				
8	46	腰巻遺跡	下平尾字腰巻・高内	段丘		○	○	○	○		
9	47	西大久保遺跡群	上平尾字西大久保他	台地	○	○	○	○	○		
10	48	棧敷遺跡	安原字棧敷	〃					○		
11	49	上小平遺跡	岩村田字上小平	〃					○		
12	50	下小平遺跡	岩村田字下小平	段丘		○	○	○	○		昭和55年度発掘調査
13	51-3	黒岩城跡	岩村田字古城	台地		○	○	○	○	○	昭和55・59年度発掘調査
14	51-1	王城跡	岩村田字古城	〃		○	○	○	○	○	昭和54年度公園化に伴い一部調査
15	51-2	石並城跡	岩村田字石並他	〃		○	○	○	○	○	
16	52	岩村田遺跡群	岩村田字六供後	〃		○	○	○	○	○	
17	44	上岩子遺跡	岩村田字上岩子他	低地					○		
18	43	西赤座遺跡	岩村田字西赤座他	台地		○	○	○	○		
19	42	中久保田遺跡	岩村田字中久保田	〃		○	○	○	○		
20	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字枇杷坂	〃		○	○	○	○		
21	38	下蟹沢遺跡	長土呂字下蟹沢・中蟹沢	低地		○	○	○	○		
22	45	新城遺跡	岩村田字新城	〃		○	○	○	○		
23	541	曾根新城跡	岩村田字下穴虫	台地						○	
24	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂隠し他	〃		○	○	○	○	○	
25	8	芝宮遺跡群	長土呂字北上中原他	〃	○	○	○	○	○		昭和58年度発掘調査

第Ⅲ章 基本層序及び概要

第1節 基本層序

栗毛坂遺跡群は、湯川の右岸、田切地形の台地上に所在し、芝間遺跡はその東端部の河岸段丘上に位置しており、標高は733~737m、湯川河床からの比高差はおよそ35mを測り、南に向って傾斜している。



第4図 芝間遺跡基本層序模式図

芝間遺跡基本土層

第Ⅰ層 茶褐色土層（耕作土）

粘性なし、しまりなし。

層厚は20~60cmを測る。

第Ⅱ層 暗褐色土層

粘性弱く、しまりなし。

粒子細かく、ローム粒子を含む。

第Ⅲ層 明褐色土層

粘性弱く、しまりなし。

粒子細かく、ローム粒子多量、パミス
を少量含む。

第Ⅳ層 遺構覆土

第Ⅴ層 黄褐色土層（ローム層）

本遺跡の遺構確認面である。

芝間遺跡の層序は、第Ⅴ層黄褐色土層に至るまでに3層に分割される。

第Ⅰ層は、耕作土で、粘性・しまりなし。粒子細かく、0.5~1cm大の小礫を含む。

第Ⅱ層は、暗褐色土層で、粒子細かく、ローム粒子・0.5~1cm大の小礫を含む。

第Ⅲ層は、明褐色土層で、粒子細かく、ローム粒子・パミスを含む。A区南側第1号土坑付近で観察されたのみで、他地区においては認められなかった。また、L区第1号竪穴状遺構付近には第Ⅱ・Ⅲ層は観察されず、黒褐色土層が20~50cmの厚さで認められた。

尚、道路面においては、道路を平坦にするための埋土と思われるローム粒子を多量に含んだ淡茶褐色土が、約20cmの厚さで観察された。

遺構覆土

芝間遺跡において検出された住居址は、道路幅の調査であるため3棟（第1・3・4号住居址）は全プランが確認されず、1棟（第2号住居址）は攪乱により床面まで破壊されている。第1号住居址は5層に分かれ、第4号住居址は4層に分割される。覆土は第1号住居址が黒褐色土と茶褐色土、第4号住居址が茶褐色土を基調としており、いずれも自然堆積と思われる。第3号住居址の第1～3層は大概黄褐色土層であり、人為堆積と考えられ、第4～6層は黒褐色土を主体としており、自然堆積の可能性が強いと考えられる。第1号特殊遺構は5層に分かれ、第1号竪穴状遺構は4層に分けられ、黒褐色土層と茶褐色土層が主体をなしており、自然堆積と考えられる。土坑は第1号土坑を除いてK区に偏在しており、第3・4・5号土坑は重複関係にある。覆土は黒褐色土と茶褐色土を基調としており堆積状況から自然堆積と考えられる。 (三石)

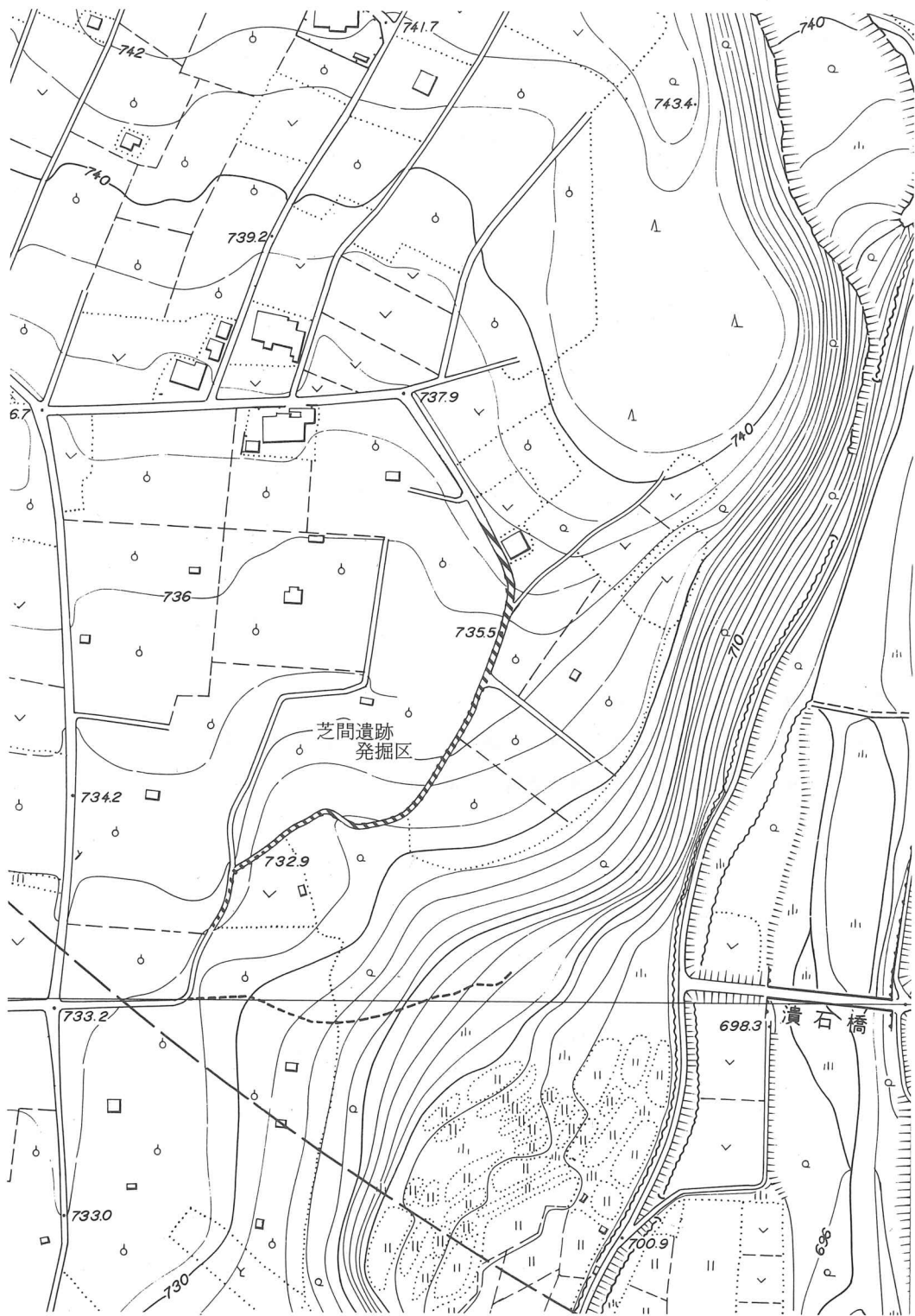
第2節 検出遺構・遺物の概要

検出遺構

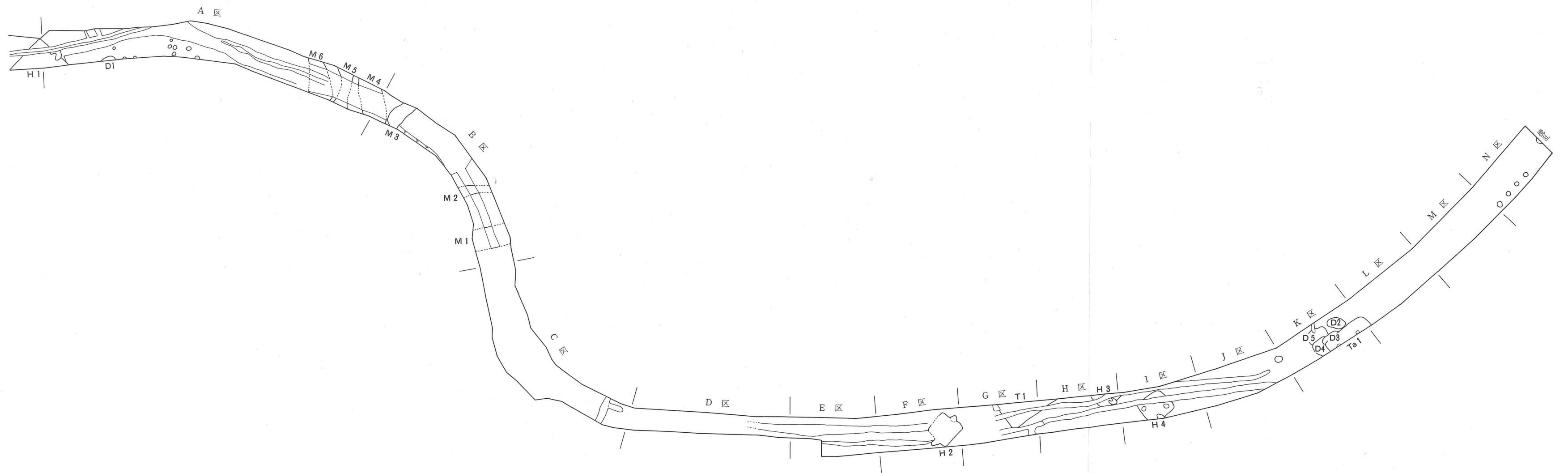
竪穴住居址	4棟	第1号住居址（古墳時代後期）、第2～4号住居址（平安時代）
特殊遺構	1基	第1号特殊遺構（平安時代）
竪穴状遺構	1基	第1号竪穴状遺構（中世）
土坑	5基	第1・2号土坑（時期不明）、第3～5号土坑（中世）
溝状遺構	6基	M1～6号溝状遺構（時期不明）

出土遺物

土器	土師器（古墳時代・平安時代）……甕・小形台付甕・鉢・埴・坏・高坏 須恵器（平安時代）……………長頸瓶・甕・壺・坏 土師質土器（平安時代）……………皿 灰釉陶器・中世以降陶磁器
石器	打製石斧・黒曜石原石
鉄器	刃子・角釘・ハサミ



第5図 芝間遺跡の地形及び発掘区設定図（1：2500佐久市基本図9による）



第6図 芝間遺跡遺構全体図

第Ⅳ章 遺構と遺物

第1節 竪穴住居址

1) 第1号住居址

遺構(第7・8図, 図版三・四)

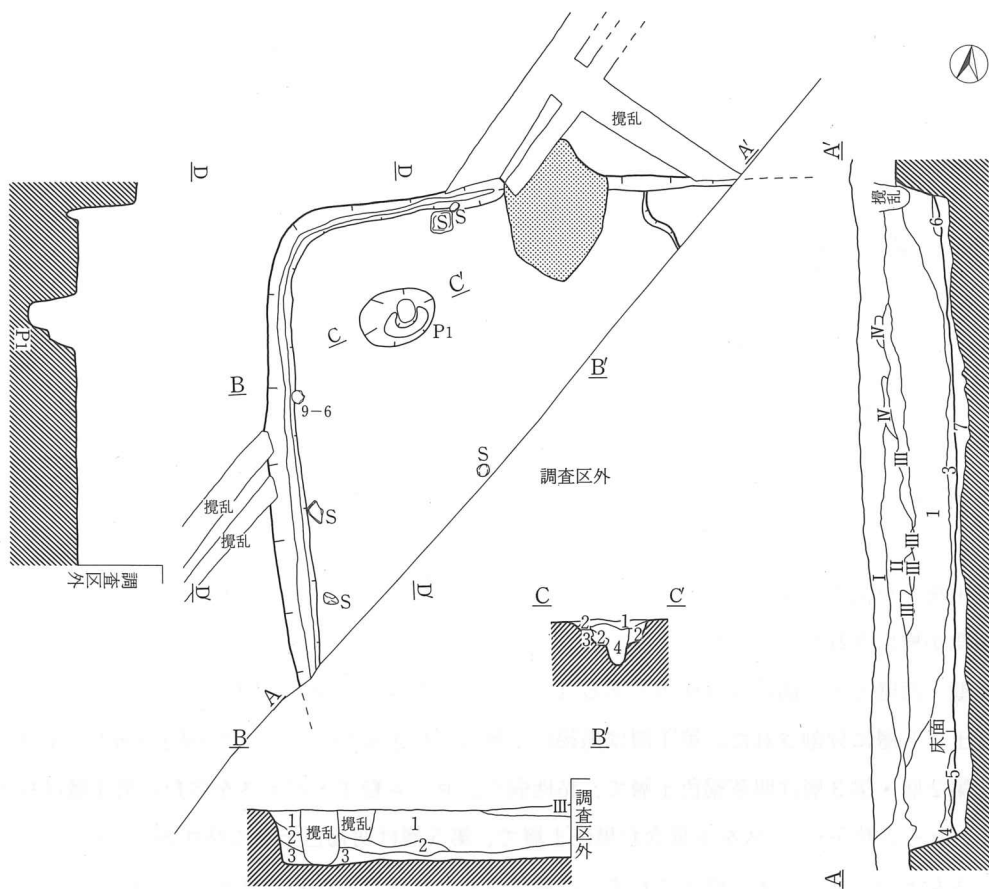
本住居址は、調査区南端部A区内に位置し、全体層序第V層黄褐色ローム層上面において検出された。他遺構との重複関係は認められないものの、水道管等を敷設するための攪乱溝によって北壁中央と東側の一部、西壁中央付近一部を破壊されている。また道路幅のみの調査であるため北西側が検出されたのみであり、南東部大半は調査区外のため未調査である。

北壁・西壁とも一部のみを検出であるため、平面形態及び規模は不明である。

覆土は5層に分割された。第1層は黒褐色土層で、粒子細かく、パミス・ $\phi 0.5$ cm大の小礫を含む。第2層・第3層は明茶褐色土層で、粘性弱く、ローム粒子・パミスを含む。第4層は粒子細かく、ローム粒子・パミスを少量含む黒色土層で、第5層は明褐色土層で粘性弱く、ローム粒子・パミスを多量に含み、床面直上にわずかに観察された。確認面からの壁高は42~61cmを測り、床面から急傾斜で立ち上る。壁体は黄褐色ローム層を利用して構築され、比較的堅固な状態である。壁溝は壁下をほぼ全周するものと考えられる。溝幅は10~20cm、深さは3.5~10cmを測り、断面形はU字状を呈する。

床面は黄褐色ローム層上の全面に4~20cmの厚さで貼床が施されている。貼床は、ロームブロック・ローム粒子・パミスを多量に含んだ茶褐色土を叩きしめて平垣に構築されており、堅緻な状態である。さらに北壁東側に一部約10cm高い面が設けられており、ベッド状遺構としての可能性が考えられる。ピットは北西隅に配される支柱穴が1個検出されたのみである。覆土は4層に分割され、1層はローム粒子・パミスを含む黒褐色土層、2層はローム粒子・パミスを多量に含む黄茶褐色土層、3層・4層は淡茶褐色土層である。平面形態は82×60cmの楕円形を呈し、南側にテラスを有する。深さはテラス部で28cm、最深部で50cmを測り、断面形は有段のU字状を呈する。

カマドは北壁中央に位置すると考えられるが、攪乱によって煙道部の一部上面を破壊されている。火床から煙道までの長さ142cm、袖部最大幅100cmの規模を有し、残存状態は良好である。煙道部は壁体を52×56cmの半円状に掘り込み、火床部は壁下の床面を84×66cmの楕円状に掘り窪め



- 1 黒褐色土層 粘性あり、しまりあり。粒子細かく、バミス・ $\phi 0.5\text{cm}$ 位の小石を含む。
- 2 明茶褐色土層 粘性弱く、しまりややあり。ローム粒子・バミスを少量含む。
- 3 明茶褐色土層 粘性弱く、しまりややあり。5層よりローム粒子・バミスを多く含む。
- 4 黒色土層 粘性弱く、しまりややあり。粒子細かく、ローム粒子・バミスを少量含む。
- 5 明褐色土層 粘性弱い。ローム粒子・バミスを多量に含む。
- 6 茶褐色土層 粘性弱く、しまりあり。ローム粒子・バミスを含む。
- 7 茶褐色土層 粘性あり、しまりあり。ロームブロック・ローム粒子・バミスを多量に含む。
焼土・灰・炭化物を少量含む。(床面下、掘り方の土層)

P1 土層説明

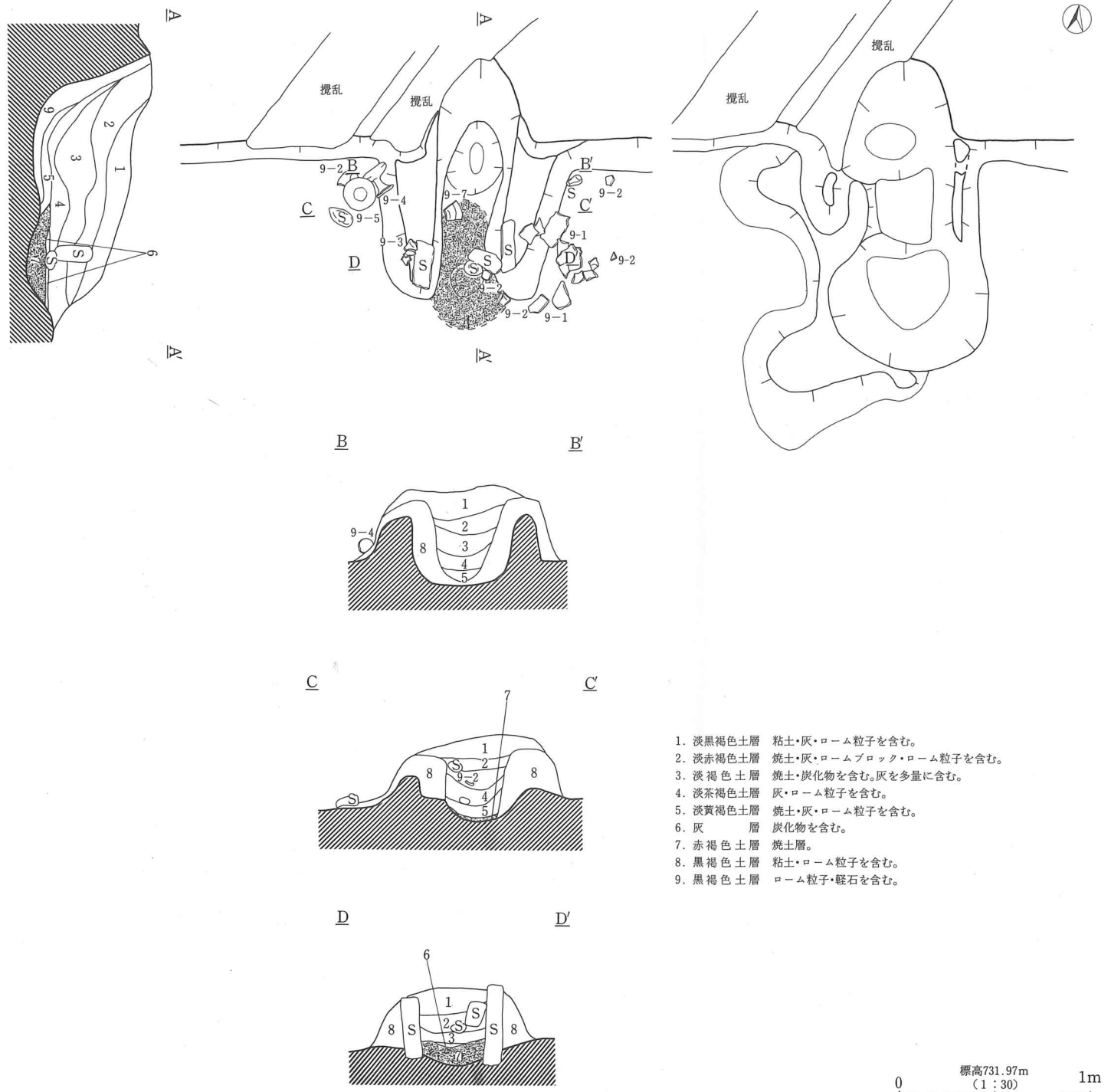
- 1 黒褐色土層 ローム粒子・バミスを少量含む。
- 2 黄茶褐色土層 粘性なし。ローム粒子・バミスを多量に含む。
- 3 淡茶褐色土層 粘性なし。ローム粒子を含む。
- 4 淡茶褐色土層 粘性なし、しまりなし。ローム粒子・バミスを少量含む。

標高732.57m
0 (1:80) 2m

第7図 第1号住居址実測図

て構築されており、焼土が10cmの厚さで確認された。袖部は黄褐色ローム層を主体とし、これに粘土・ローム粒子を含む黒褐色土（第8層）で被覆し、火床の両サイドには扁平な石を配し外側を黒褐色土（第8層）で補強して構築されている。

遺物の出土状況は、特にカマド周辺部に集中してみられ、9-3がカマド内より、9-1・2・4・5がカマド周辺の床面及び床面付近より出土している。他に9-6は西壁直下床面より、わずかに浮いた状態で出土した。9-7はカマドの南約30cmより床面からやや浮いた状態で出土した。さらに貼床下より滑石製の白玉（9-9）が出土している。（三石）



第8図 第1号住居址カマド実測図

遺物（第9図，図版十一・十四）

本住居址からは、土師器・須恵器・灰釉陶器・石器が出土している。このうち灰釉陶器は混入遺物である。図化した遺物は、土師器7点、須恵器1点、白玉1点である。

土師器の器種には、甕・小形甕・鉢・埴・坏・高坏があり、須恵器には坏がある。

9-1は、最大径を口縁部に有し、胴部から外傾して口縁部が立ち上がり、胴部がふくらまない土師器長胴甕である。内面は口縁～頸部ヨコナデで、胴部ナデにより調整されている。外面は口縁～頸部ヨコナデで、胴部縦位のヘラケズリが施されている。

9-2は、底部附近のみで全体の器形は明らかではないが、大形の土師器鉢になると思われる。内面は横位のヘラナデが施され、外面は縦位のヘラケズリの後、ヘラナデにより調整されている。

9-3は、最大径を胴の中位に有し、口縁部短かく外傾する土師器小形甕である。内面は口縁部ヨコナデがなされ、胴部横位のハケメ調整が施され、外面は口縁部ヨコナデ、胴部縦位のヘラケズリ調整が行われている。

9-4は、坏部に不明瞭な稜を有し、口辺部外傾外反し、脚部は柱状を呈し、裾部で大きく広がる器形をもつ土師器高坏である。坏部は内外面とも黒色研磨がなされており、相模地方で出土する黒彩土器的な感じがするが脚部までなされていない。脚部の調整は、内面柱状部ヘラケズリ、裾部ヨコナデが、外面柱状部は縦位のヘラミガキ、裾部ヨコナデの後、暗文が観察できる。

9-5は、胴部内弯して立ち上がり、稜を有して口縁部直線的に外傾する深さ10.2cmの平底の土師器鉢である。内面は横位のヘラミガキが見られ、外面は口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリの後、横位及び斜位のヘラミガキが施されている。

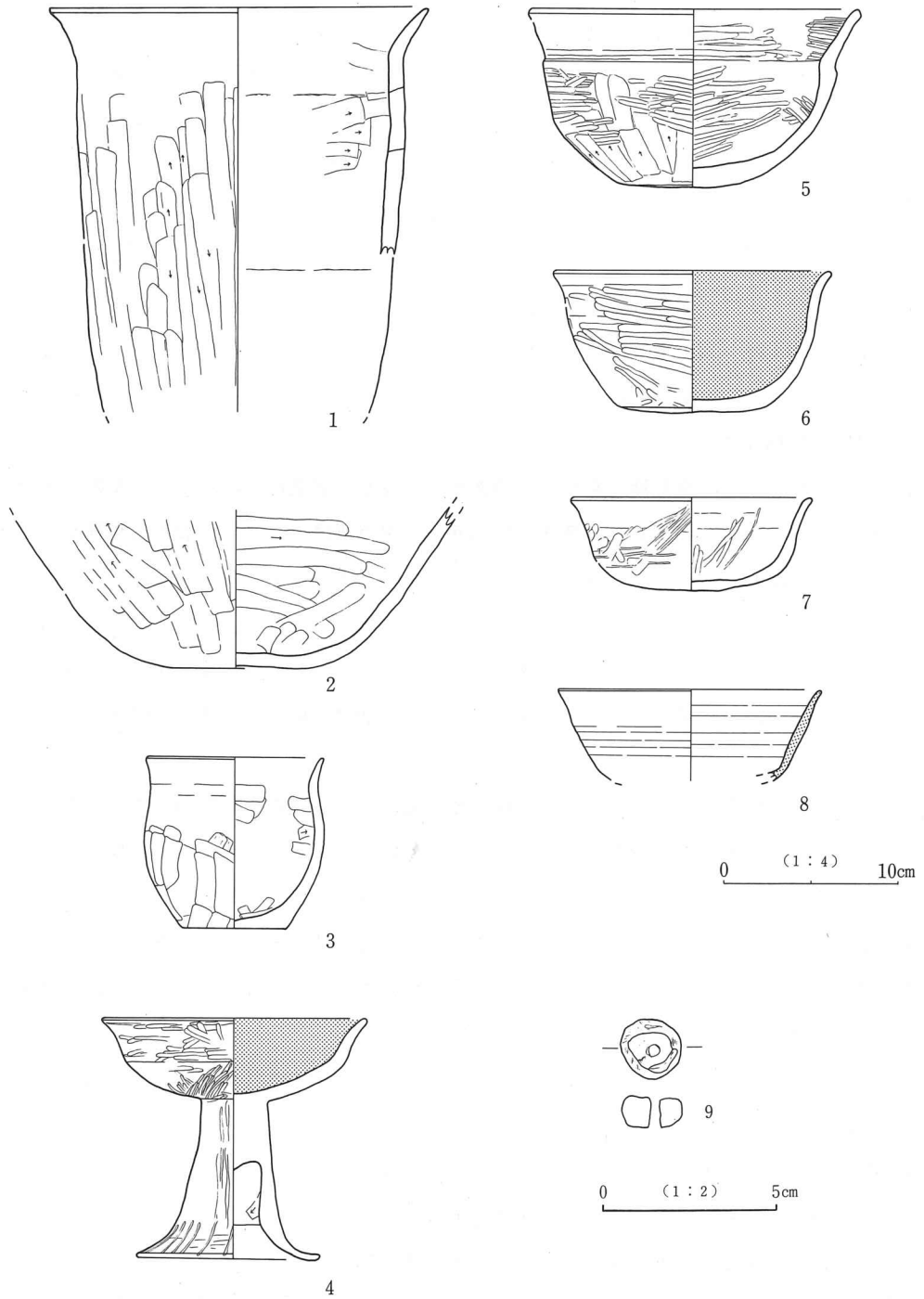
9-6は、体部内弯して立ち上がり、口縁部短かく外反する平底の土師器埴である。内面は一部に地肌を残すやや粗雑な黒色研磨がなされており、外面は口縁部ヨコナデ、体部横位・斜位のヘラミガキが施されている。底部はヘラケズリにより成形されたものと思われる。

9-7は、口辺部内弯して立ち上がり、口縁部短かく外反する丸底気味の土師器坏である。内面は口縁部ヨコナデ、底部附近にヘラミガキが見られ、外面は口縁部ヨコナデの後、ヘラナデが施され底部にはヘラミガキが観察できる。

9-8は、口辺部直線的に立ち上がり、端部でわずかに外反する底部欠損の須恵器坏である。内外面の調整はロクロヨコナデによりなされている。

9-9は、床下より出土した滑石製の白玉で直径1.7cm，厚さ0.8cmを測る。表裏ともに研磨されており、側面には斜め方向の研磨痕が観察できる。

以上のことから本住居址の所産期は、9-1の土師器長胴甕が胴部にふくらみをもたないこと、土師器坏で明瞭な稜を有するものが存在しないことなどから古墳時代後期（鬼高期）後半と考える。（高村）



第9图 第1号住居址出土土器・白玉実測図

第2表 第1号住居址出土土器観察表

挿図 番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
9-1	甕	21.6 (23.1) —	口縁部外傾外反する。 最大径は口径	内) 口縁～頸部ヨコナデ 胴横位ヘラケズリの後ナデ 外) 口縁～頸部ヨコナデ 胴部縦位のヘラケズリ	回転実測A No.5・9・14・15・16・17・ 18 I区
9-2	鉢?	— (8.2) 8.3		内) 横位のヘラナデ 外) 縦位のヘラケズリの後、ヘラナデ	回転実測B No.23・24・25・27・29・30・ 31・33・34、カマド
9-3	小形甕	(10.1) 9.6 (5.9)	口縁部短かく外傾し、やや外反する。 最大径は胴中位に位置する。	内) 口縁部ヨコナデの後、胴部横位のハケメ調整 外) 口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ	回転実測B No.4・21・22・23、I区
9-4	高坏	15.2 13.8 10.6	坏部は不明瞭な稜を有し、口縁部は外傾外反する。 脚部は柱状を呈し、裾部で大きく広がる。	内) 坏部 黒色研磨 脚部 柱状部ヘラケズリ、裾部ヨコナデ 外) 坏部 黒色研磨 脚部 柱状部縦位ヘラミガキ、裾部ヨコナデの後、 暗文	完全実測 No.26
9-5	鉢	(18.7) 10.2 6.5	胴部は内弯して立ち上がり、稜を有して、口縁部直線的に外傾する。	内) 横位のヘラミガキ 外) 口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリの後、横位・斜位のヘラミガキ	回転実測A No.24
9-6	碗	(16.0) 8.0 8.5	体部は内弯して立ち上がり、口縁部短かく外傾外反する。	内) 黒色研磨 外) 口縁部ヨコナデの後、体部横位・斜位のヘラミガキ	回転実測B No.1
9-7	坏	(13.7) 5.3 ・	体部は内弯して立ち上がり、端部で短かく外傾外反する。 底部丸底気味	内) ヨコナデの後、ヘラミガキ 外) ヨコナデの後、ヘラナデ、底部ヘラミガキ	回転実測B No.3・7・8・32
9-8	坏 (須恵器)	(15.0) (5.3) —	口辺部直線的に立ち上がり、端部でわずかに外反する。	内外面 ロクロヨコナデ	回転実測B I区、II区

2) 第2号住居址

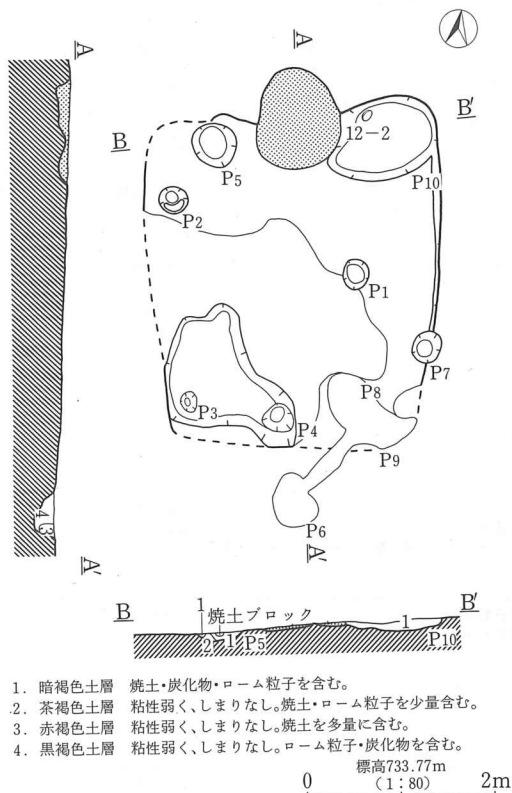
遺構 (第10・11図, 図版四)

本住居址は調査区G区とF区の境に位置し、以前農道を設ける時、破壊をうけカマドと床面を所々確認できるのみであった。

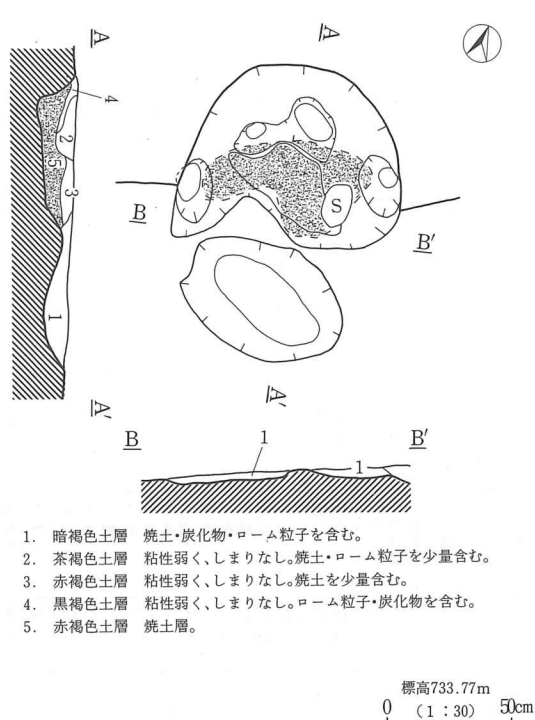
平面形態は、推定であるが南北333cm、東西260cmを測り、北壁長280cm、南壁長240cm、東壁長337cm、西壁長321cmの隅丸長方形を呈すと思われる、主軸方位はN-10°-Wを示す。

覆土は残っている部分で1～2cm位の厚さで、僅かに炭化物を含む黒褐色土が堆積しており、平垣で、しまりがあることから床面と思われる。壁残高は0～8.5cmを測り、形状・壁体は観察が困難であった。

ピットは計10個検出された。そのうち柱穴と思われるものはP₁・P₂・P₃・P₇・P₉の5個で、P₁は27×33cm、深さ19cmの楕円形を呈し、断面形はU字状となる。P₂は28×30cm、深さ12cmの楕円形を呈し、テラスを有する。P₃・P₉は掘り込み面において検出されたもので、P₃は18×23cm、深さ15cmの楕円形を呈し、断面形はU字状となる。P₅・P₁₀は北壁中央のカマド両脇にあ



第10図 第2号住居址実測図



第11図 第2号住居址カマド実測図

り、P₅は46cm、深さ10cmの円形を呈し、断面形は逆台形となり、覆土は焼土・炭化物・ローム粒子・土器片を含むことから、灰落し用ピットとも考えられる。P₁₀は95×105cm深さ6cmの隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形となり、覆土は焼土・炭化物・ローム粒子・土器片を含み、貯蔵穴と思われる。P₄・P₆・P₈は入口の施設に伴うものと思われ、P₄・P₈は掘り込み面において検出され、P₄は30×33cmの楕円形を呈し、深さ10cmを有する。P₈は20×23cmの楕円形を呈する。P₆は瓢箪形を呈し、径9cmと10cmの二つの下面を有する。

カマドは北壁中央に位置し、幅90cm、長さ118cmの規模を有する。残存状況は極めて悪く、旧状を留めていないが、火床部は72×92cmの半円状に緩やかな傾斜で掘り込んで構築されたと思われ、火床部と北壁の接する両箇所に袖石が埋められていた痕跡、火床中央部に2つの支脚石の埋められていた痕跡が観察できる。焚口部は火床より一段低く45×65cmの楕円形を呈する。尚、火床面にある安山岩は熱を受けていることからカマド構築材として使用したと思われる。

遺物の量は少なく、分布状況はP₅・P₁₀に集中しており、12-1はP₁₀内底面に、12-2はP₁₀内底面より5cm上面で横転した状態で出土した。(羽毛田伸)

遺物（第12図，図版十二）

本住居址からは、土師器・須恵器・炭化米が出土しており、そのうち土師器2点を図化した。土師器の器種には、薄手長胴甕・小形甕・坏があり、須恵器には壺あるいは甕・坏がある。

土師器甕は、薄手長胴甕で胎土は赤褐色を呈する。頸部直線的に立ち上がり、口縁部で短かく外反し、「コ」の字状になる器形である。外面の調整は胴部ヘラケズリにより器壁を極度に薄くしてあり、口縁部周辺はヨコナデが見られる。

12-1は、土師器の甕であるが、口縁部から胴上部までの破片であるため全器形は知り得ないが小形台付甕になる可能性がある。器形は肩部に明瞭な稜を有し、頸部直線的に立ち

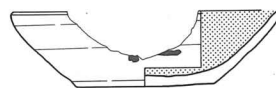
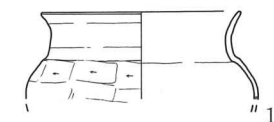
上がり口縁部で短かく外反し、「コ」の字状を呈する。口縁部ヨコナデにより調整されており、外面は胴部ヘラケズリが施され、器肉が極めて薄い土器で武蔵型甕と思われる。

12-2は、土師器坏で墨書土器であるが字の部分が欠損しており判読は不能である。器形は、口径13.9cm、底径7.5cmの口辺部外傾し、やや内弯気味に立ち上がる平底の土器で、内面黒色研磨されている。調整は、内・外面とも右回転のロクロヨコナデがなされており、底部ヘラケズリにより成形が行われている。黒色研磨は、口辺部付近光沢があり丁寧な感を受けるが、底面部には使用の際できたものか半分以上に小さなひび割れが観察できる。また、この坏の充填土を水で洗浄した所、炭化米が20余粒存在し、当時の食生活を考える上で貴重な資料となるものと思われる。尚、炭化米の詳細な鑑定については、付編に掲載されている。須恵器には、外面叩き目がある大甕（壺？）の破片が2片出土しており、また、坏はロクロヨコナデ調整の口縁部が2点出土している。

以上のことから、土師器の「コ」の字状口縁甕・小形台付甕の武蔵形甕、内面黒色研磨のなされた墨書土器坏が底部ヘラケズリである点、さらに、小片ではあるが須恵器のロクロヨコナデ調整のみられる坏等から、本住居址の所産期は平安時代前葉と考えられる。（高村）

第3表 第2号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
12-1	甕	(10.5) (4.6) —	口縁部外傾外反し、「コ」の字状をなす。 器肉薄い。	内) 口縁部ヨコナデ 外) 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ	回転実測B No.30
12-2	坏	13.9 4.0 7.5	口辺部外傾し、やや内弯気味に立ち上がる。 底部平底。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ（右回転） 底部ヘラケズリ	完全実測 No.1 墨書土器



0 (1:4) 10cm

第12図 第2号住居址出土土器実測図

3) 第3号住居址

遺構 (第13・14図, 図版五・六)

本住居址は調査区H区とI区の境に位置し、南東壁コーナーと東壁北側から南壁にかけて斜めに攪乱溝 (KM5・6) によって上面破壊をうけており、また、住居址の西側大部分が調査区外の為、全プランを知り得なかった。

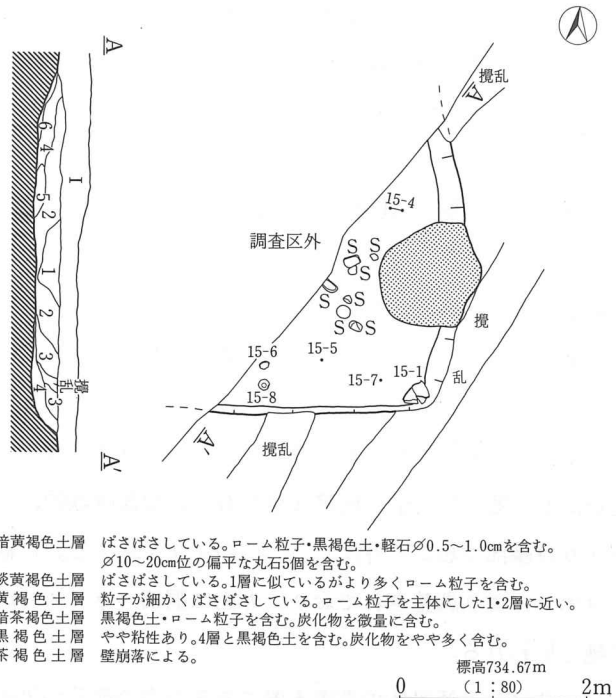
覆土は6層に分割され、1層・2層・3層の土質・含有物が類似しており、特に3層のローム粒子主体の堆積状態から、上面3層は人為堆積とも考えられる。4層・5層には共に炭化物を含み黒褐色土が主体であり自然堆積の可能性

が強い。以上のことから、この住居址は土に埋没する前に人為的に埋められたとも考えられる。

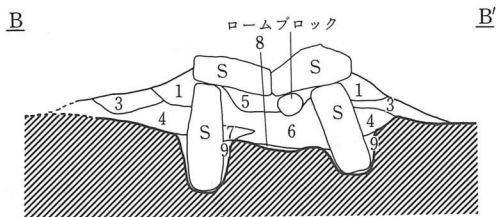
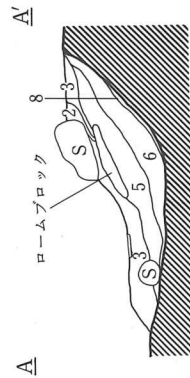
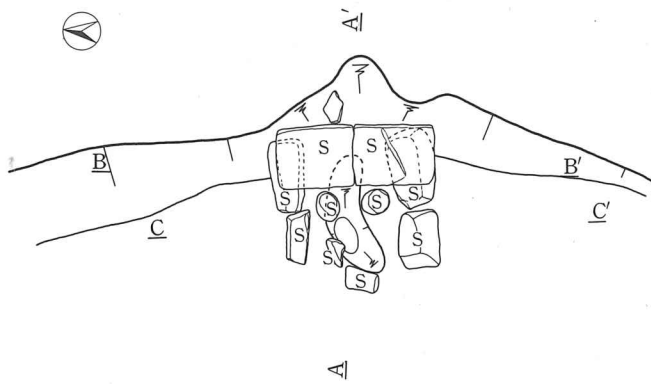
壁残高は4つの壁が検出されていないが、21~30cmを測り、床面から緩やかな傾斜で立ち上がり、壁体はやや軟弱であった。

床面は黄褐色ローム層上に、ローム粒子を含んだやや粘性のある黒褐色土で全般によく踏み固められ、カマド周辺で特に堅固であり、ほぼ平坦である。ピットは調査区内においては検出されなかった。

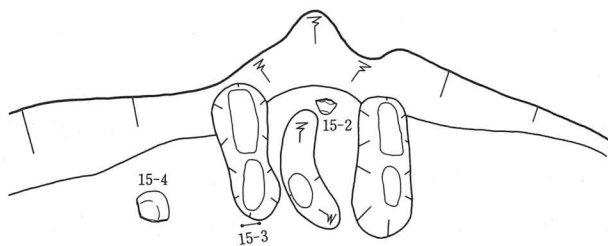
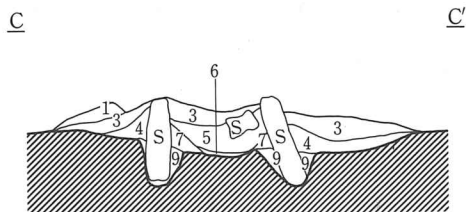
カマドは、東壁中央と思われる所に位置し、主軸95cm、袖部幅67cmを測り、カマド主軸方位N-84°-Eを示し、残存状況は極めて良好であった。煙道部は東壁体中央を緩い山形状に掘り込みカマド奥壁に添って緩やかな傾斜で立ち上がる。煙道部の構築材としては、軽石、安山岩等を用いたと思われる。天井部は24×60cm、厚さ12~16cmの面取を施こされた直方体の安山岩が、後列左右袖石の上に乗っている状態で検出された。袖部は前列と後列にそれぞれ平行に接して袖石が配置されていた。いずれも面取りの施こされた直方体の安山岩で、黄褐色ローム層に13~20cmの深さに、やや「ハ」の字状に埋められ、火床より20~25cm露出している状態であった。補強材として袖石両脇に灰色粘土とローム粒子を混ぜた土で被覆し、袖部を構築していたと考えられる。支脚石は火床中央部より横列に2個検出された。いずれも火床面下僅かに掘り込まれた正位の状



第13図 第3号住居址実測図



1. 暗茶褐色土層 黒褐色土・ローム粒子・炭化物を含む。
2. 灰褐色土層 砂層・粒子粗い。
3. 淡茶褐色土層 ローム粒子・焼土・炭化物を含む。
4. 淡黄褐色土層 ローム粒子・焼土・炭化物・灰を含む。
5. 灰茶褐色土層 焼土・炭化物・灰を含む。
6. 灰褐色土層 炭化物・灰を多量に含む。焼土を含む。
7. 灰色土層 焼土・炭化物・灰を含む。砂層。
8. 灰褐色土層 砂層・粒子粗い。
9. 暗褐色土層 焼土・ローム粒子を含む。



標高734.37m
(1:30) 0 1m

第14図 第3号住居址カマド実測図

態で検出された。その各々は、上面で $\phi 6\text{ cm}$ と $\phi 8\text{ cm}$ 、下面で $\phi 9\text{ cm}$ と $\phi 11\text{ cm}$ を測る円柱状に加工された軽石であった。また、焚口前部に火床面に接して横転している $\phi 7\sim 9\text{ cm}$ の円柱状の軽石は、右側の支脚石上面と接合関係にある。この様にカマドが良好な形で残っていたことは、平安時代のカマドの形態を知る上で貴重な資料と言えよう。

遺物の分布状況は、本住居址の全プランが把握できない為、速断はできないが、調査内において床面に散在し、特にカマド内、及び周辺、東南壁コーナー下に集中する傾向が看取される。図示した15-1・7は東南壁コーナー下に、15-1は床面に接し横転した形で出土した。15-2・3はカマド内から、15-2は胴下部～底部のみであるが、火床面に接し倒立した状態で出土した。15-4はカマド左袖石外側に床面に接して出土し、15-5は完形品で、床面に接した正位の状態で、15-6は床面に接し仰向けの状態で出土した。 (羽毛田伸)

遺物 (第15図, 図版十二・十四)

本住居址からは、土師器・須恵器が出土しており、そのうち土師器6点、須恵器2点を図化した。図示した8点は、いずれも床面直上あるいは床面、カマド内の出土である。

土師器の器種には、薄手長胴甕・小形台付甕?・坏・蓋があり、須恵器には、大甕・坏がある。

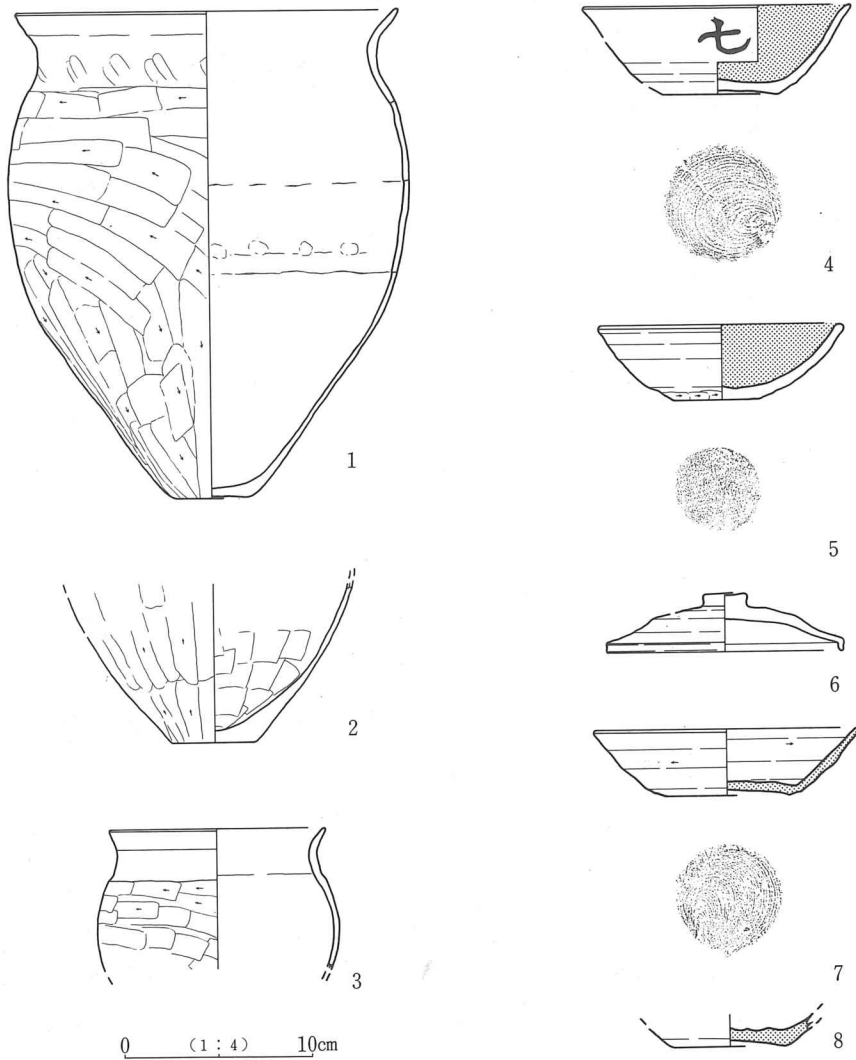
15-1は、土師器の薄手長胴甕であり、口縁部「コ」の字状を呈し、最大径を胴上部にもち、底径が小さくなる武蔵型甕と思われる。内面の調整は、口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整がなされ、胴部中位に指頭の押さえ痕が観察できる。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部はヘラケズリが行われている器肉の薄い土器である。15-2は、薄手長胴甕底部付近の破片であるが、15-1と同様器肉の薄い土器で器形もほぼ同形となると思われる。内面には炭化物が付着している。

15-3は、土師器の甕であるが口縁部から胴上部までの破片であるため全器形は知り得ないが、口径が11.3cmで第2号住居址出土の12-1をやや大きくした同形の小形台付甕の可能性がある。内面の調整は口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整が見られる。外面は、口縁部ヨコナデ、胴部横位のヘラケズリが行われている。

15-4は、土師器の墨書土器坏である。器形は口辺部内弯して立ち上がり、口縁端部でやや外反する。内面黒色研磨がなされており、光沢のある丁寧な研磨である。内・外面の調整はロクロヨコナデがなされており、底部は回転糸切りによって成形されている。底径と口径の比は1:2.3で口径が底径の約2倍に達している。墨書の文字は「七」と判読できる。

15-5は、土師器の坏で器形は口辺部内弯して立ち上がり、底径と口径の比が1:2.8と口径が底径の3倍近くに達しており、特異な器形をしている。内面黒色研磨されており、光沢が見られ丁寧な研磨である。内・外面の調整は、ロクロヨコナデがなされており、底部はヘラケズリにより成形が行われている。

15-6は、土師器の蓋で天井部は内弯し、口縁端部で直角に屈曲し、つまみ部は厚めのボタン



第15図 第3号住居址出土土器実測図

状を呈する。器肉は、天井部中央付近が最も厚く口縁部になるほど薄くなる。調整は内・外面ともロクロヨコナデがなされている。

15-7は、須恵器の坏で口辺部ほぼ直線的に外傾する。内・外面の調整は右回転のロクロヨコナデがなされており、底部周辺はヘラケズリがみられ、回転糸切りにより成形されている。

15-8は、須恵器の坏の底部で回転糸切りにより成形されている。

その他、須恵器の大甕胴部破片が出土しており、外面に叩き目が観察できる。

以上、本住居址からは、土師器で薄手長胴甕2個体、坏2個体、蓋1個体、須恵器で坏2個体、大甕が出土しており、15-1・3の口辺部「コ」の字状を呈する甕、15-7の須恵器坏が底部周

第4表 第3号住居址出土土器観察表

挿図 番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
15-1	甕	(22.2) 25.9 (4.0)	口縁部短かく外傾する。 最大径は胴上部に位置する。 器肉薄い。	内) 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、胴中位に指頭による おさえの後、ナデ 外) 口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ	回転実測B No.2
15-2	甕	— <8.5> 4.4		内) 横位ヘラナデ 外) 縦位ヘラケズリ	回転実測A No.24
15-3	甕	(11.3) <7.5> —	口縁部外傾外反する。	内) 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 外) 口縁部ヨコナデの後、胴部横位ヘラケズリ	回転実測B No.17・18・19、カマド
15-4	坏	14.2 4.7 6.1	口辺部内弯して立ち上がり、端部 でやや外反する。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	完全実測 No.5・6・22 墨書土器
15-5	坏	12.7 4.0 4.5	口辺部内弯して立ち上がる。 底部平底。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ 底部・底部付近ヘラケズリ	完全実測 No.10
15-6	蓋	12.4 3.1	天井部は内弯し、端部で直角に屈 曲する。	内外面ロクロヨコナデ	回転実測A No.8
15-7	坏 (須恵 器)	(14.1) 3.6 6.5	口辺部ほぼ直線的に外傾する。	内外面ロクロヨコナデ(右回転) 底部回転糸切り	回転実測B No.7、床面
15-8	坏 (須恵 器)	— <1.7> (6.0)		内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	回転実測B No.11

辺ヘラケズリがなされていることと、15-5の土師器坏の底部ヘラケズリにより成形されていることなどから本住居址の所産期は平安時代の前葉と考える。(高村)

4) 第4号住居址

遺構(第16・17図, 図版七)

本住居址は、調査区北側I区内に位置し、全体層序第V層黄褐色ローム層上面において検出された。他遺構との重複関係は認められないものの、攪乱溝により北壁と西壁の一部上面を攪乱されており、さらに北東隅と南壁下西側に攪乱土坑が認められる。南東隅は調査区外であり未調査である。平面形態及び規模は、北壁長265cm、西壁長305cm、南壁と東壁は推定で各々275cm、324cmを測り、南北にやや長い隅丸長方形を呈する。長軸方位はN-3.5°-Eを示す。

覆土は、上面は根による攪乱を受けているが、4層に分割された。1層は暗茶褐色土層で、ローム粒子・パミス・黒褐色土を含む。2層は淡黄褐色土層でローム粒子を多量に含み、パミス・黒褐色土を含む。3・3'層は淡茶褐色土層でローム粒子を含み、3'層は3層と比較して、黒褐色土を多量に含んでいる。

確認面からの壁高は12~29.5cmを測り、西壁は比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面は、黄褐色ローム層を踏み固めてあり、全体に平坦で堅固な状態である。ピットは南壁直

下中央より1個検出されたのみである。径42cm、深さは15cmを測り、断面形はU字状を呈する。覆土は粘性のある黒褐色土層1層で構成されていた。

カマドは、東壁南寄りに位置すると考えられるが、残存状況は不良である。煙道部は調査区外であり未調査のため、形態及び規模等不明であるが、壁体をなだらかに掘り込んで設けられる。火床部は壁下の床面を45×30cmの楕円状に浅く掘り窪めて構築されており、焼土が約3cmの厚さで確認された。袖部は崩落しているため形状は明らかでないが、袖石に使用されたと思われる礫が火床付近より検出された。この他、カマド周辺に散在している礫もカマドの構築材であると考えられる。石質は安山岩と集塊岩である。

遺物の出土状況は、カマド内及びその周辺部に集中する傾向が認められ、他には、特に集中している箇所は見られず、散在している状態で出土した。図示した18-1・2・3・4・5・6・7・11がカマド内及びその周辺部、18-8が南西

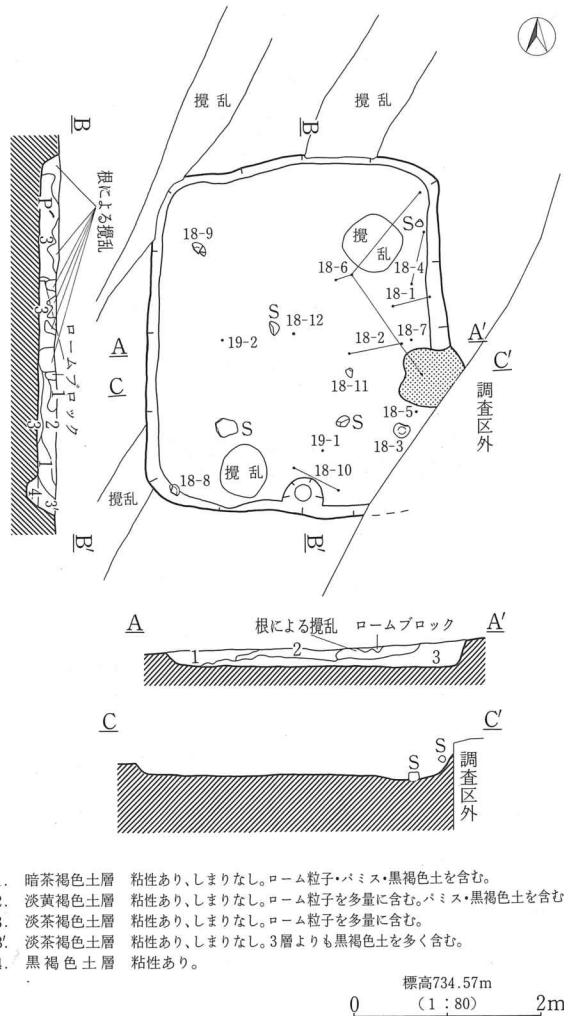
隅、18-9が北西隅、18-10が南壁下中央付近、18-12が住居址ほぼ中央より出土し、また、19-1はP₁の北側約30cm、19-2は西側中央付近より出土している。(三石)

遺物(第18・19図, 図版十二・十三・十四)

本住居址からは、土師器・須恵器・鉄器が出土しており、そのうち土師器6点、須恵器6点、鉄器2点を図化した。18-4・5・8・9・12の5点は、覆土からの出土であり、他はそれぞれカマド、床面、床面直上出土の土器である。19-1・2の鉄器は、2点とも床面直上の出土である。

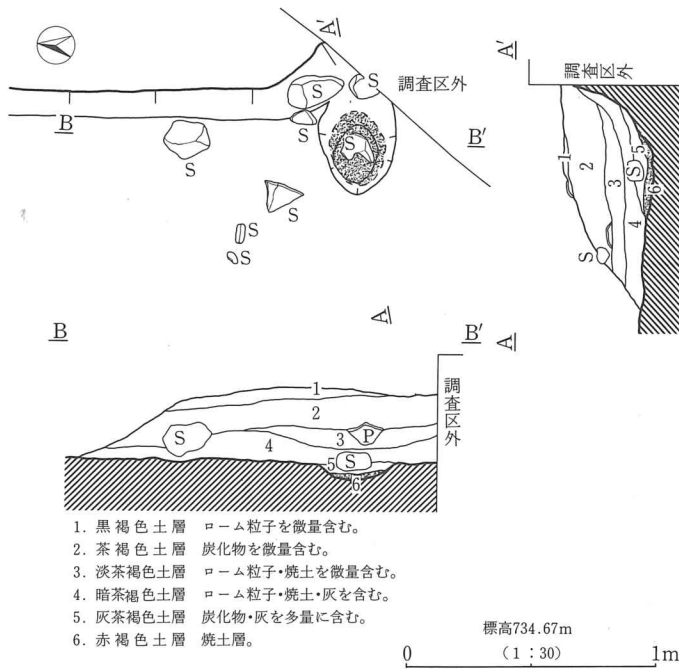
土師器の器種には、甕・坏があり、須恵器には、長頸瓶・坏・蓋がある。

18-1は、胎土赤褐色の土師器薄手甕で、口辺部直立気味に立ち上がり短かく外反するやや「コ」



第16図 第4号住居址実測図

1. 暗茶褐色土層 粘性あり、しまりなし。ROM粒子・バミス・黒褐色土を含む。
2. 淡黄褐色土層 粘性あり、しまりなし。ROM粒子を多量に含む。バミス・黒褐色土を含む。
3. 淡茶褐色土層 粘性あり、しまりなし。ROM粒子を多量に含む。
- 3'. 淡茶褐色土層 粘性あり、しまりなし。3層よりも黒褐色土を多く含む。
4. 黒褐色土層 粘性あり。



第17図 第4号住居址カマド実測図

の字状を呈する器形をとっており、頸部付近までの破片であるが、最大径は胴部にあるものと思われる。外面の調整は口辺部から頸部までヨコナデ、胴部はヘラケズリがなされている。

18-2は、土師器坏で、口辺部外傾し、口縁部で内弯して立ち上がる口径推定19.2cmの大形の坏である。内面は黒色研磨されており、光沢のある丁寧な研磨である。外面ロクロヨコナデのように観察されるがヘラによる調整も考えられる。底部はヘラケズリにより成形されている。

18-3は、墨書の土師器坏で、口辺部内弯して立ち上がる。内面黒色研磨がなされ、光沢のある丁寧な研磨である。外面は左回転のロクロヨコナデ調整で、底部ヘラケズリにより成形されている。墨書は横書きに右から「上品」と判読できる。

18-4は土師器坏で底部付近で内弯し、後、直線的に外傾して立ち上がる。内面黒色研磨がなされており、光沢のある丁寧な研磨である。外面は左回転のロクロヨコナデ調整で、底部ヘラケズリにより成形されている。

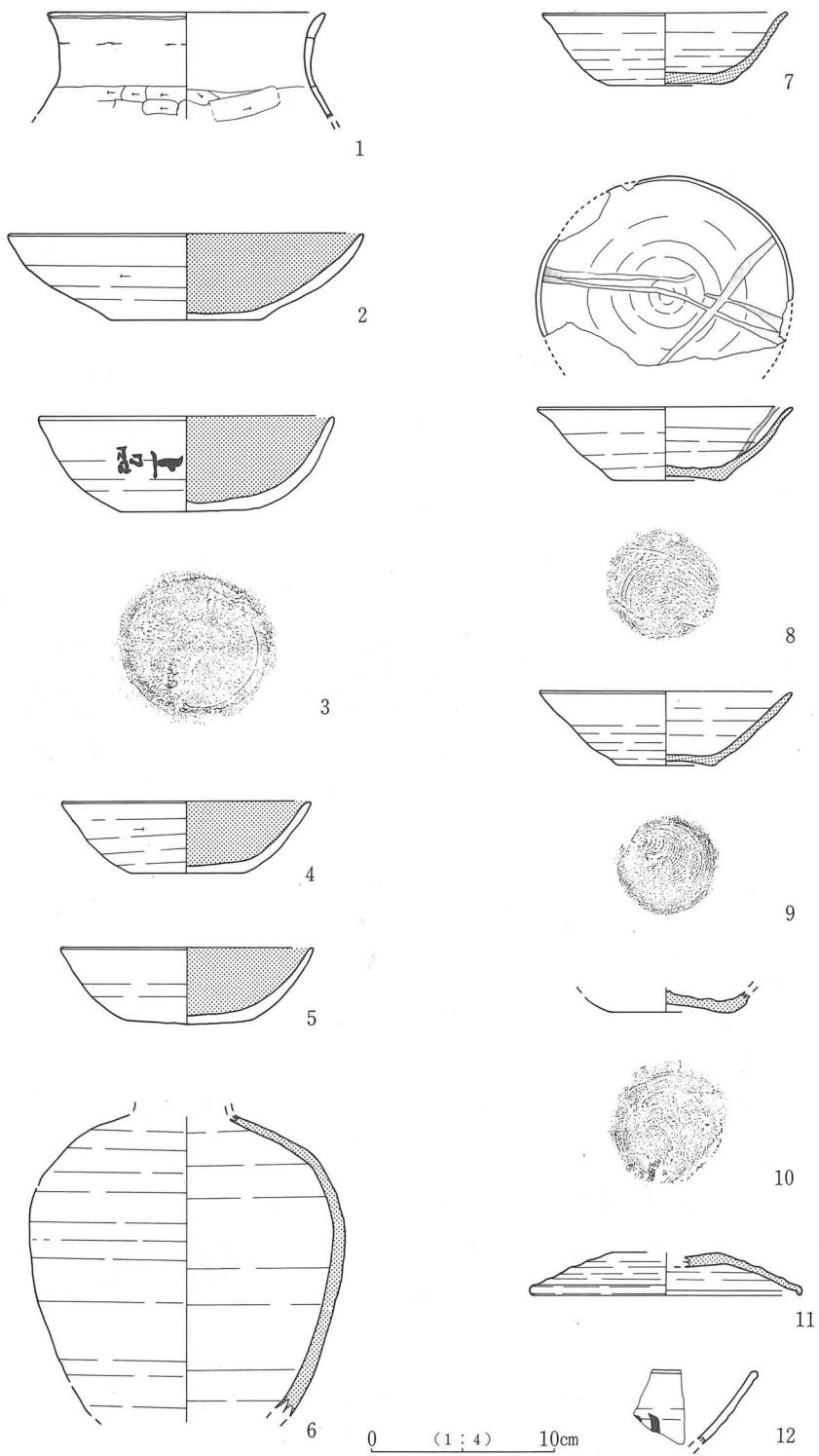
18-5は、土師器坏で18-4と同様な器形を呈している。内面黒色研磨がなされており、光沢はあまり見られず、やや粗雑な研磨である。外面は右回転のロクロヨコナデ調整であるが凸凹が見られ粗製な感を受ける。底部はヘラケズリにより成形されている。

18-6は、須恵器長頸瓶で、肩部に丸みを帯びた器形を呈し、内・外面ロクロヨコナデにより成形されており、頸部より上部と底部を欠損している。

18-7は、須恵器坏で口辺部内弯気味に立ち上がり端部で外反する器形を呈し、内外面右回転のロクロヨコナデ調整で、底部はヘラケズリにより成形されている。

18-8は、須恵器坏で口辺部内弯し、端部で外反する器形で、内外面右回転のロクロヨコナデ調整がなされ、底部は回転糸切りにより成形されている。内外面に火禱きが見られる。

18-9は、須恵器坏で口辺部直線的に外傾し、内外面右回転のロクロヨコナデ調整がなされ、



第18图 第4号住居址出土土器实测图

第5表 第4号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
18-1	甕	(15.2) (6.6) —	口縁部直立ぎみに立ち上がり、外傾外反する。	内) 口縁部ヨコナデ、胴部ナデ 外) 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	回転実測B No8・10
18-2	坏	(19.2) 4.7 (8.1)	口辺部わずかに内弯して立ち上がる。底部平底。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ	回転実測B No24・25
18-3	坏	15.8 5.2 7.5	口辺部内弯して立ち上がる。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ (左回転) 底部回転ヘラケズリ	完全実測 No20 墨書土器「上品」
18-4	坏	(13.7) 3.9 (6.2)	口辺部内弯して立ち上がる。	内) 黒色石磨 外) ロクロヨコナデ (左回転) 底部ヘラケズリ	回転実測B No6・9
18-5	坏	(13.8) 4.1 (6.8)	口辺部内弯して立ち上がる。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ (右回転) 底部ヘラケズリ	回転実測B No14
18-6	長頸瓶 (須恵器)	— (16.3) —	最大径は胴上位に位置する。	内外面ロクロヨコナデ	回転実測A No5.11.12.13.26 カマド
18-7	坏 (須恵器)	(13.2) 3.9 (6.2)	口辺部内弯気味に立ち上がり、端部で外反する。	内外面ロクロヨコナデ (右回転) 底部ヘラケズリ	回転実測B No21、I区
18-8	坏 (須恵器)	(13.8) 4.0 (6.2)	口辺部わずかに内弯して立ち上がり、端部で外反する。	内外面ロクロヨコナデ (右回転) 底部回転糸切り	回転実測A No1 内外面に火罨あり
18-9	坏 (須恵器)	13.6 4.0 5.2	口辺部直線的に外傾する。	内外面ロクロヨコナデ (右回転) 底部回転糸切り	回転実測A No18
18-10	坏 (須恵器)	— (1.2) 6.6		内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	回転実測A No15・20
18-11	蓋 (須恵器)	(14.6) (2.3)	天井部は直線的に開き、端部は直角に屈曲する。つまみ部欠損。	内外面ロクロヨコナデ	回転実測B No23
18-12	坏	— — —	口辺部ほぼ直線的に外傾する。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ	破片実測B No19

底部は回転糸切りにより成形されている。底径と口径の比が1:2.6となり底径がやや小さめである。

18-10は、須恵器坏の回転糸切がなされた底部破片である。

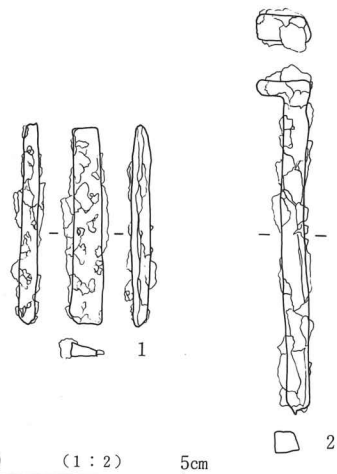
18-11は、須恵器蓋でつまみ部が欠損しており、天井部直線的に開き、端部は直角に屈曲する。内外面ロクロヨコナデ調整がなされている。

18-12は、内面黒色研磨の墨書土器土師器片であるが、文字は判読できない。

19-1の鉄器は、残存長5.2cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmの刀子である。基部と刃先は欠損している。

19-2は角釘と思われ、残存長8.8cm、厚さ0.6cmを計る。

その他、図示し得なかった土器に、土師器の薄手長胴甕と思われる底部、内面黒色研磨坏片、須恵器坏などがある。石



第19図 第4号住居址出土鉄器実測図

器としては、黒曜石の大きな原石が1つ出土している。

以上のことから、土師器杯は、底部ヘラケズリによりすべて成形されており、また、須恵器杯の共伴数も土師器杯と同様な比率にあり、土師器薄手甕がやや「コ」の字状を呈していることなどから、本住居址の所産期は平安時代前葉と考える。(高村)

第2節 特殊遺構

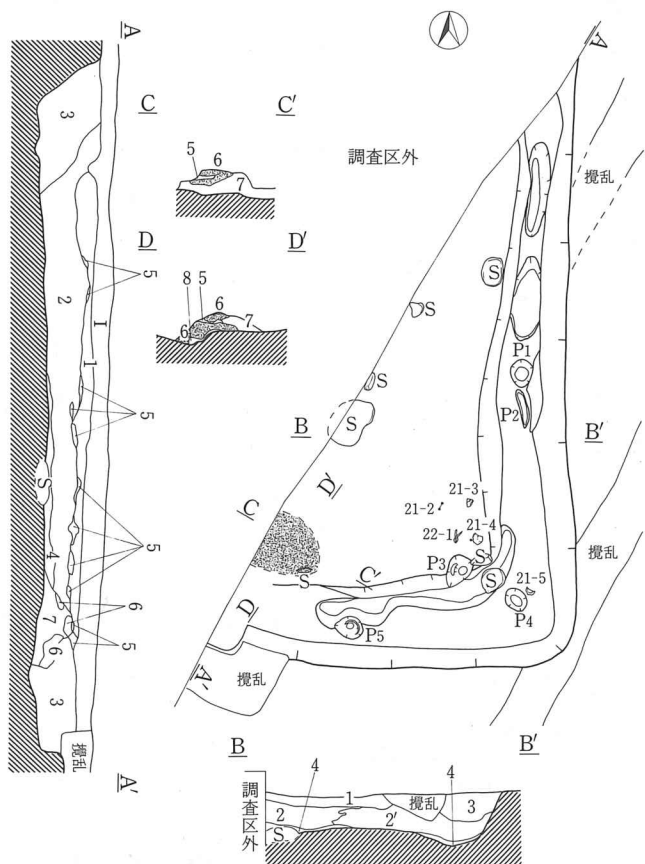
1) 第1号特殊遺構

遺構 (第20図, 図版八)

本遺構は調査区G区とH区の境に位置し、東南コーナーが攪乱溝(KM3)により、南壁の一部が攪乱土坑によって上面破壊をうけており、また、本遺構の西側大部分が調査区外の為、全プランを知り得なかった。

覆土は6層に分割され、1層下の炭化層(5層)と壁下を取り囲む様に底面まで堆積している3層は特異な堆積状態を示し、3層は土質がばさばさしており、ローム粒子、軽石 ϕ 0.5~1cmを多量に含むことから、人為堆積とも考えられる。また遺構の南側の高さ40cmを測るマウンド状の焼土層(4・7層)は5層と頂上部分で水平を保ち、6層にはさまれた形で、葦の炭化物が検出された。

壁残高は調査部分で45~65cmを測り、床面からやや急な傾斜で立ち上がり、壁体は堅固である。



- | | |
|------------|--|
| 1. 黒褐色土層 | ローム粒子・炭化物を微量含む。 |
| 2. 淡黒褐色土層 | ローム粒子・ ϕ 0.5cm大の軽石を微量に含む、粒子細かい。 |
| 2'. 淡黒褐色土層 | ローム粒子・パミスを含む。 |
| 3. 淡茶褐色土層 | ローム粒子・軽石 ϕ 0.5~1cm位を多量に含む、ばさばさしている。 |
| 4. 黒褐色土層 | ローム粒子を微量含む、炭化物を含む。 |
| 5. 暗黒褐色土層 | 炭化物を多く含む、層状に残留。 |
| 6. 赤褐色土層 | 焼土層、炭化物を含む。(かや、よし痕検出) |
| 7. 淡黒褐色土層 | 2に似ているが炭化物・焼土を含む。 |
| 8. 淡黄褐色土層 | ローム粒子を多量に含む。 |

第20図 第1号特殊遺構実測図

底面は黄褐色ローム層上にややしまりのある平坦面で、壁下周囲を幅35~80cm、深さ3~10cmの浅く掘り込んだ周溝が施こされている。

ピットは浅く掘り込んだ周溝上に点在する (P₁・P₂・P₃・P₄・P₅)。P₂は25×28cmの楕円形で、深さ6cmを測り、P₄は20×25cmの楕円形で、深さ34cmを測り、P₅は23×28cmの楕円形で、深さ19cmを測る。またP₂とP₄の距離は24cm、P₄とP₅の距離は180cmを測る。以上のことから柱穴とも思われる。P₃は31×45cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測り、P₁・P₃共に性格不明である。

また床面上に安山岩、集塊岩が点在しており、調査区外に接している長さ50cmの楕円形の集塊岩は扁平であり、上面僅かに擦過痕が観察でき、叩台とも考えられる。

遺物の分布状況は本遺構の全プランが把握できないため速断はできないが、調査内において、遺物の量は少く、東南壁コーナー周溝脇に集中する傾向が看取される。図示した21-1・2は2層内より、21-3・4は4層内より、21-5は周溝内より、また22-1の鉄器は床面上より、これらいずれも東南壁コーナー周溝脇下より出土した。

以上のことから本遺構は従来の平安時代の建物構造とは異なるものとも考えられ、今後同種の遺構が検出されることを期待したい。(羽毛田伸)

遺物 (第21・22図, 図版十三)

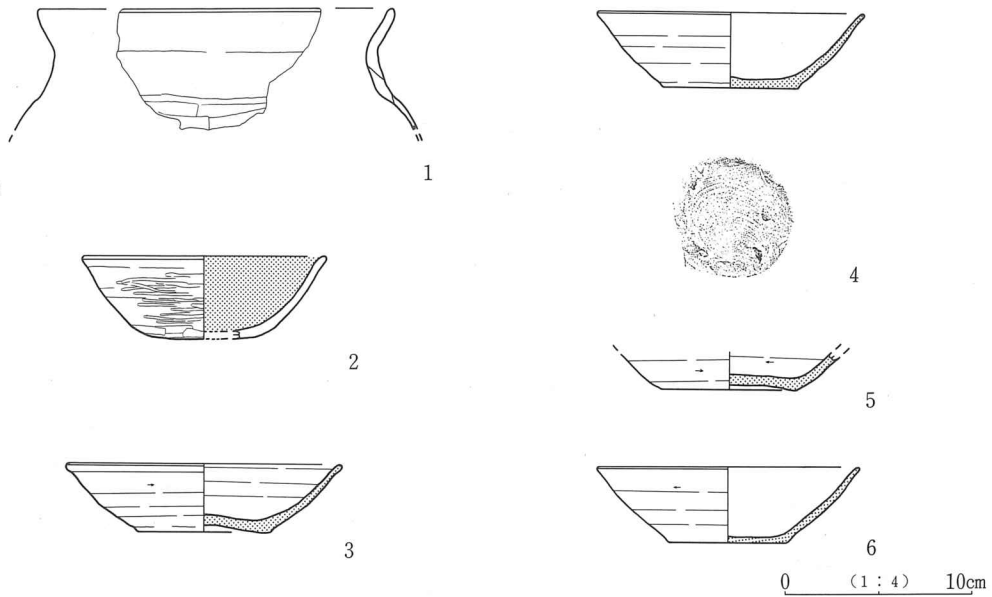
本遺構からは、土師器・須恵器・陶器・鉄器が出土している。このうち、陶器の常滑は小片で1点であるが混入遺物と考える。図化したのは、土師器2点、須恵器4点、鉄器1点である。鉄器は床面直上の出土であるが、その他はすべて覆土からの出土である

土師器の器種には、甕・小形甕・坏がある。須恵器には、長頸瓶・坏・蓋・壺 or 甕がある。

21-1は、土師器薄手甕で口辺部「コ」字状を呈す器形で、内面ヨコナデ、外面は頸部までヨ

第6表 第1号特殊遺構出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
21-1	甕	(19.0) (6.9) —	口縁部外傾外反し、端部でわずかに内弯する。 胴部器肉薄い。	内) ヨコナデ 外) 口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	破片実測A No.6
21-2	坏	(12.8) 4.4 (5.4)	口辺部内弯して立ち上がり、端部はわずかに外反気味。	内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデの後、横位ヘラミガキ、下部底部付近ヘラケズリ	回転実測B No.9・10
21-3	坏 (須恵器)	(14.0) 4.0 (7.0)	口辺部内弯して立ち上がり、端部で外反する。	内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	回転実測B No.8・11
21-4	坏 (須恵器)	(14.6) 3.6 (7.2)	口辺部内弯気味に外傾し、端部で玉縁状となる。	内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	回転実測B No.12
21-5	坏 (須恵器)	— (2.0) (7.2)	口辺部内弯して立ち上がる。	内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	回転実測B No.15
21-6	坏 (須恵器)	(13.8) 5.0 (6.2)	口辺部わずかに内弯気味に立ち上がり、端部で外反する。	内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	回転実測B



第21図 第1号特殊遺構出土土器実測図

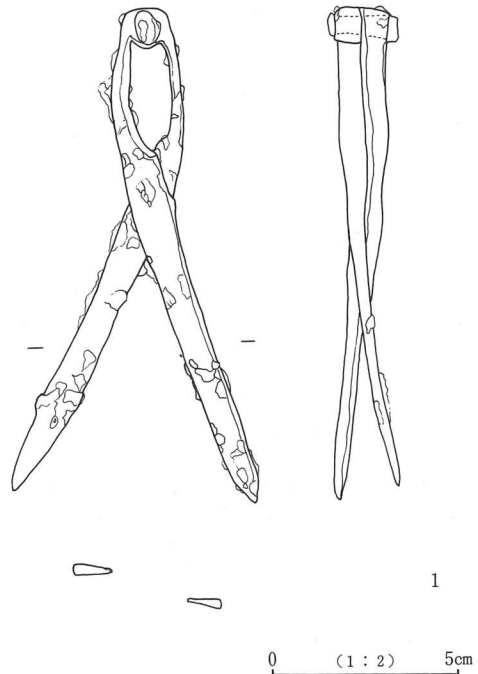
コナデ、胴部ヘラケズリの調整が見られ武蔵型の甕と思われる。

21-2は、土師器坏で、口辺部内弯して立ち上がり、端部はわずかに外反している。内面は黒色研磨され、光沢のある丁寧な研磨である。外面は、ロクロヨコナデの後、横位のヘラミガキがなされ、下部及び底部付近はヘラケズリにより調整されている。

21-3・6は、須恵器坏で口辺部内弯して立ち上がり、端部で外反している。内外面ともロクロヨコナデ調整されており、底部は回転糸切により成形されている。

21-4は、須恵器坏で口辺部内弯気味に外傾し、端部玉縁状となる。内外面ともロクロヨコナデ調整されており、底部は上底気味に回転糸切により成形されている。

21-5は、須恵器坏の底部で回転糸切により



第22図 第1号特殊遺構出土鉄器実測図

確認面からの壁高は16~46.5cmを測り、比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。底面は全体にはほぼ平坦であるが、南に向かってわずかにレベルを低下させている。ピットは2個検出された。いずれも西壁から約1m離れた位置より検出された。P₁は径40cmの円形を呈し、深さは19cmを測る。P₂は径30cmの円形を呈し、深さは38cmを測り、断面形はいずれもU字状を呈する。



2

0 (1:4) 5cm

第24図 第1号竪穴状遺構出土土器実測図

遺物の出土状況は、24-1・2とも北壁付近の底面より出土している。

遺物 (第24図, 図版十三)

本遺構からは土師器片・須恵器片が出土しており、このうち2点が図化できた。器種は2点とも土師質土器である。24-1は、直線的に開き端部で外反する口辺部をもち、24-2は、口辺部はやや内弯気味に外傾する。調整はいずれも内外面ロクロヨコナデ、底部は回転糸切りが施される。この他、図示し得なかったものとして、土師質土器小皿の口辺部に位置する小片1片と、回転糸切の施された底部片1片がある。また混入遺物として、土師器には坏・高台付坏・甕の小片があり、坏・高台付坏には内面に黒色研磨が施される。須恵器には坏・高台付坏の小片がある。

(三石)

第7表 第1号竪穴遺構出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
24-1	土師質土器小皿	9.0 2.0 4.6	口辺部直線的に開き、端部で外反する。	内外面ロクロヨコナデ (右回転) 底部回転糸切り	完全実測 No.1
24-2	土師質土器小皿	8.5 2.1 5.2	口辺部内弯気味に外傾する。歪み著しい。	内外面ロクロヨコナデ (右回転) 底部回転糸切り	完全実測 No.2

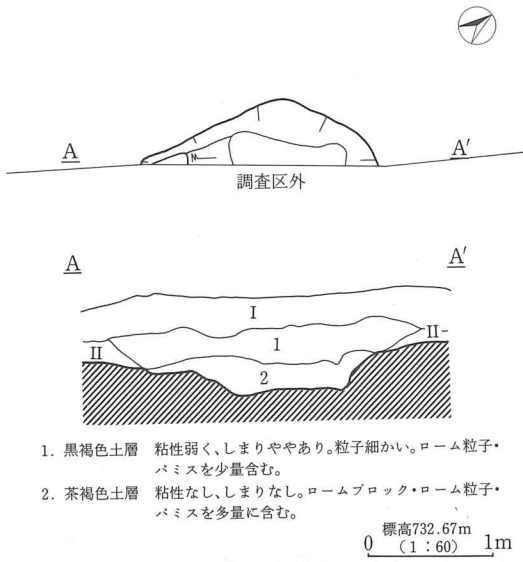
第4節 土 坑

遺構 (第25・26図, 図版九)

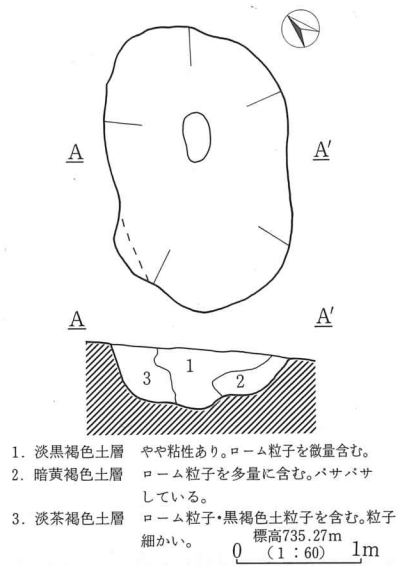
本遺跡から検出された土坑は総数で5基を数える。これらの土坑のうち第1号土坑を除き、調査区北端K区に集中して認められ、第3・4・5号土坑は重複関係にある。

第1号土坑は、調査区南端A区東寄りに位置し、土層断面により全体層序第II層暗褐色土層より構築されていることが確認された。他遺構との重複関係はなく単独で検出されたものの、東側大部分は調査区外であり未調査であるため、平面形態及び規模等は不明である。南端に一段のテラスを有しており、確認面からの深さはテラス部で10cm、最深部で31cmを測る。覆土は2層に分割された。1層はローム粒子・バミスを少量含む黒褐色土層、2層はロームブロック・ローム粒子・バミスを多量に含む茶褐色土層である。

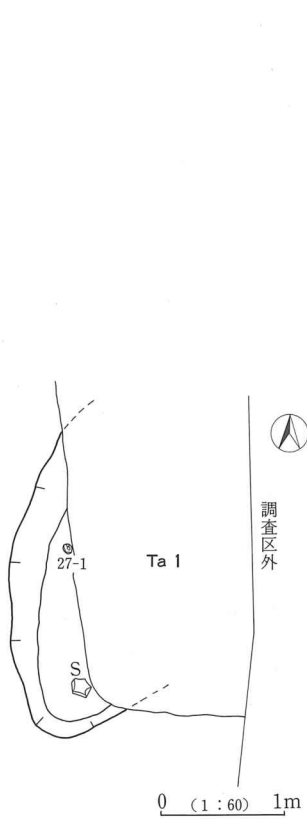
第2号土坑は、全体層第V層黄褐色ローム層上面において単独で検出された。平面形態は230×



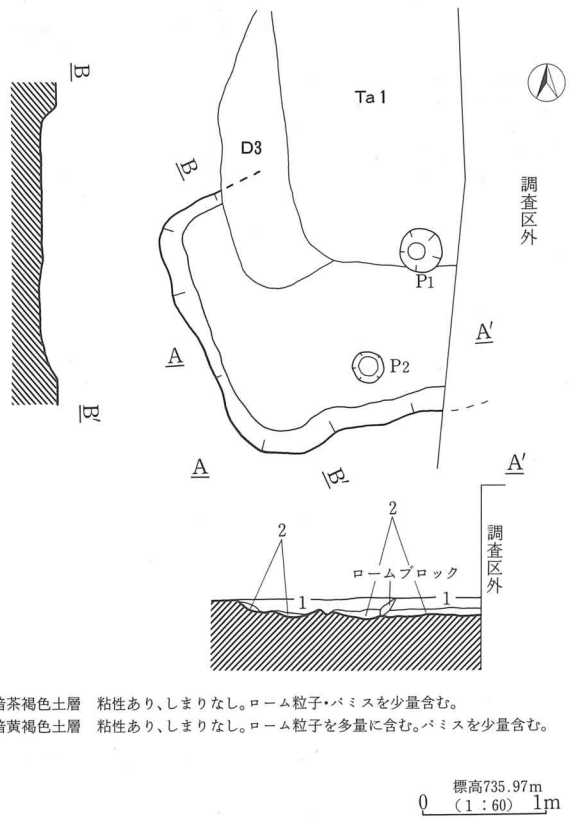
D 1



D 2



D 3



D 4

第25図 第1～4号土坑実測図

148cmの楕円形を呈し、深さは56cmを測る。覆土は1層淡暗黒褐色土層、2層暗黄褐色土層、3層淡茶褐色土層の3層に分割された。

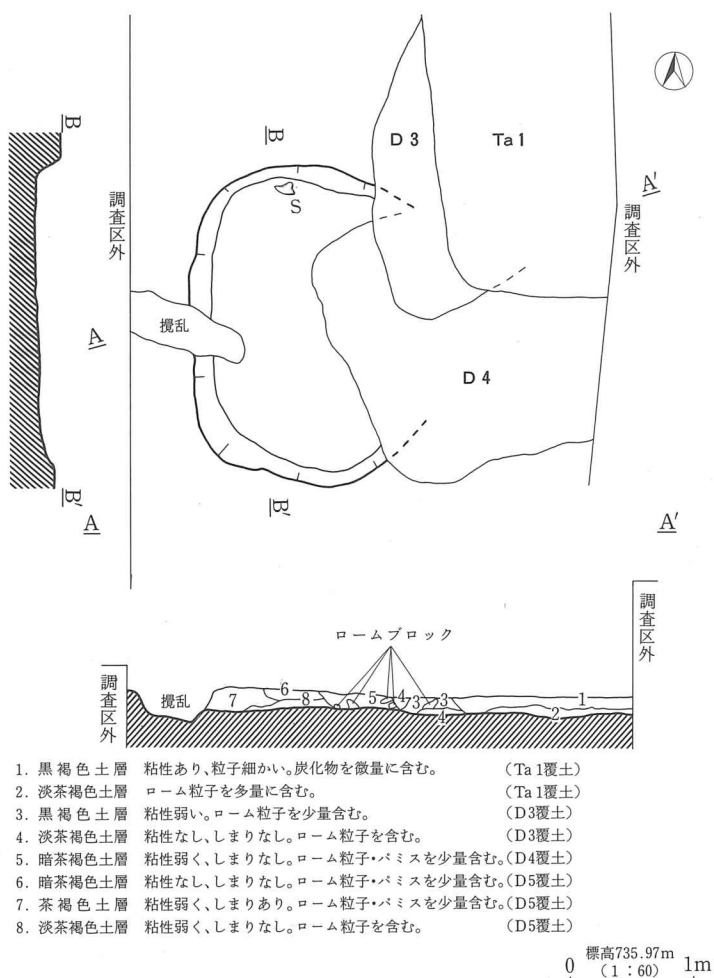
第3・4・5号土坑は、重複関係にあり、さらに第1号竪穴状遺構とも重複しており、その新旧関係については、D5→D4→D3→Ta1の順に構築されたことが確認された。平面形態は、D4・5は一辺220~250cmの隅丸方形を呈するものと考えられるが、D3については一部分のみの検出であるため形態等不明である。確認面からの深さは10~20cmを測り、底面は全体にほぼ平坦である。

尚、第4号土坑の底面からは、径35cm、25cmの円形を呈するピットが2個検出された。覆土は、茶褐色土層を基調としている。

遺物の出土状況は、図示した26-1が第3号土坑底面より出土しているが、第1・4・5号土坑は覆土よりわずかに遺物が出土したのみであり、第2号土坑については遺物の出土はみられなかった。

遺物(第27図, 図版十三)

第2号土坑からは図示できた遺物はなく、土師器の小片が2点出土し



1. 黒褐色土層 粘性あり、粒子細かい。炭化物を微量に含む。(Ta1覆土)
2. 淡茶褐色土層 ROM粒子を多量に含む。(Ta1覆土)
3. 黒褐色土層 粘性弱い、ROM粒子を少量含む。(D3覆土)
4. 淡茶褐色土層 粘性なし、しまりなし。ROM粒子を含む。(D3覆土)
5. 暗茶褐色土層 粘性弱く、しまりなし。ROM粒子・パミス少量含む。(D4覆土)
6. 暗茶褐色土層 粘性なし、しまりなし。ROM粒子・パミス少量含む。(D5覆土)
7. 茶褐色土層 粘性弱く、しまりあり。ROM粒子・パミス少量含む。(D5覆土)
8. 淡茶褐色土層 粘性弱く、しまりなし。ROM粒子を含む。(D5覆土)

第26図 第5号土坑実測図



1
0 (1:4) 5cm

第27図 第3号土坑出土土器実測図

第8表 第3号土坑出土土器観察表

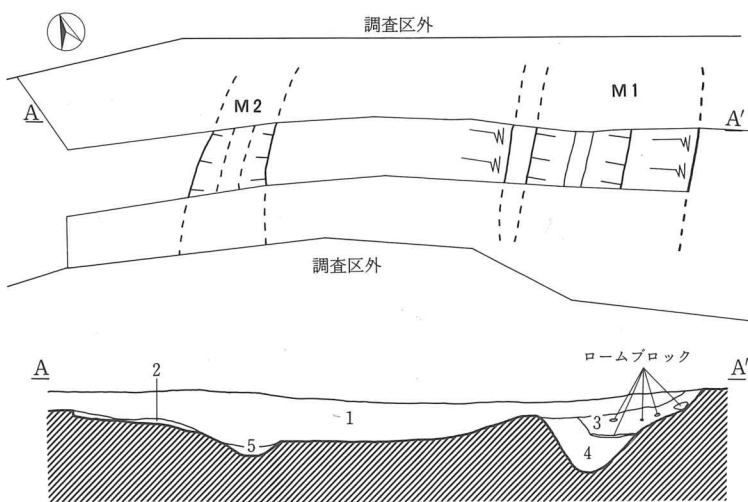
挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
27-1	土師質土器小皿	8.8 1.5 5.4	器高低く、短かい口辺が直線的に外傾する。	内外面ロクロコナデ 底部回転糸切り	完全実測 No. 1

たのみである。第3号土坑からは内外面ロクロヨコナデ、底部に回転糸切りの施された26-1一点のみである。第4号土坑からは土師器・須恵器が出土しているが、図化できたものはない。土師器の器種には甕・坏がある。甕は口縁部にロクロヨコナデ、胴部にヘラケズリの施されたものであり、坏には内外面ロクロヨコナデの施されたものと内面に黒色研磨の施されたものがある。須恵器は1点のみで小片であり器種は不明である。第5号土坑からは内外面ロクロヨコナデの施された坏の口辺部に位置すると思われる小片1点と玄武岩製の打製石斧の欠損品が1点出土したのみである。以上これらの遺物は混入遺物と考えられ、その所産期を決定する資料とはなり得ないため、各土坑の所産期は不明である。しかし第3土坑より26-1が底面より出土しており、第4・5号土坑は第3土坑と形態に類似性が認められることから、第3・4・5号土坑は第1号竪穴状遺構と何らかの関連がある可能性が考えられる。(三石)

第5節 溝状遺構

遺構(第28・29・30図, 図版九)

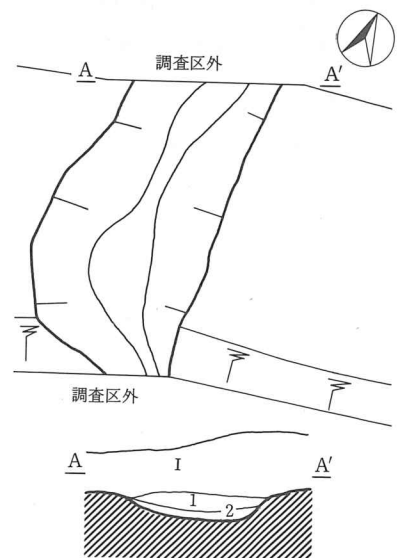
M1・2号溝状遺構は、調査区のB区東側に位置し、道路拡幅にともなう調査のため、全プラ



1. 暗黒褐色土層 粘性あり、ローム粒子を微量含む。
2. 淡茶褐色土層 ローム粒子を多量に含む。バサバサしている。
3. 淡黄褐色土層 ロームブロック・ローム粒子を含む。
4. 暗黒褐色土層 粘性あり、ローム粒子を含む。
5. 黒褐色土層 砂質、小石を含む。流水の痕跡あり。

0 標高731.37m (1:120) 4m

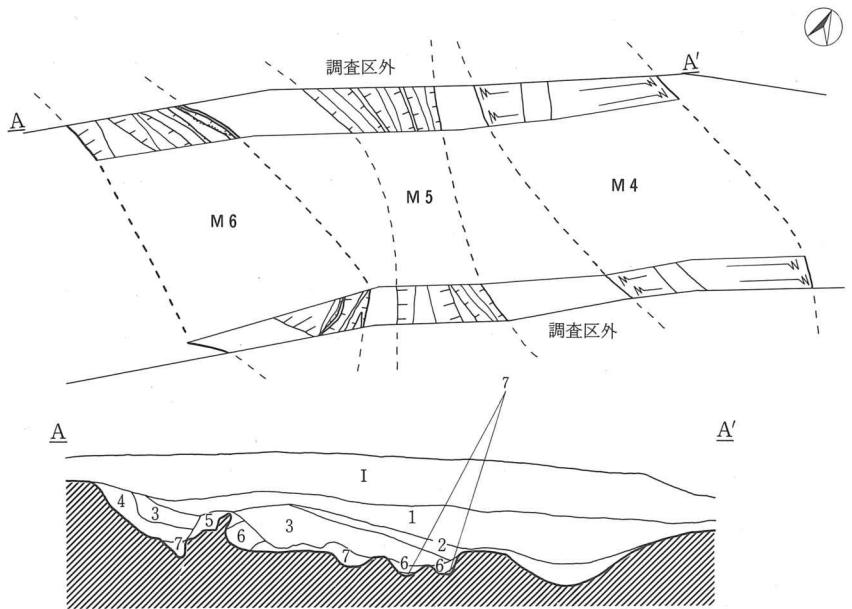
第28図 第1・2号溝状遺構実測図



1. 黒褐色土層 粘性あり。ローム粒子・軽石 ϕ 1~2cmを含む。
2. 茶褐色土層 ローム粒子を多量に含む。

0 標高731.17m (1:80) 2m

第29図 第3号溝状遺構実測図



1. 黒褐色土層 粘性あり、粒子やや細かい。
2. 淡黒褐色土層 1層に多量にローム粒子を含む。
3. 淡茶褐色土層 軽石 ϕ 1~2cmを含む。ローム粒子を含む。
4. 淡黒褐色土層 ロームブロックを含む。流れこみと思われる。
5. 黄褐色土層 ローム粒子を多量に含む。崩落と思われる。
6. 黒褐色土層 粘性あり、ローム粒子を微量に含む。
7. 砂 層 流水によって小石・軽石・ローム粒子を含む。

標高732.37m
(1:120) 4m

第30図 第4・5・6号溝状遺構実測図

ンを把握できなかった。地形的には、凹状の所に位置しているため、全体層序II層の暗褐色土層が深い所で75cm堆積しており、その下面より検出された。M1は、幅260cm、深さ92cmを測り、断面形は緩いU字形を呈し、覆土は2層に分かれる。M2は、幅90cm、深さ16cmを測り、砂質・小石を含み流水の痕跡が観察できた。M1・2ともに時代性格は不明である。

M3号溝状遺構は、調査区のB区西側、地形的に凹状の所に位置し、全プランは知り得なかった。幅は100~160cm、深さ6~40cmを測り、覆土は2層に分かれるが、時代性格の判明は困難である。

M4・5・6号溝状遺構は、調査区のA区東側隅に位置し、地形的に凹状であるため、全体層序II層の暗褐色土層が深い所で80cm堆積しており、その下面より検出された。M4は幅300cm、深さ50~55cmを測るが、何分道路拡幅にともなう調査のため、全プランを知り得ず、また、本遺構に共伴する遺物の出土がないことから、時代・性格等は不明である。M5・6は、底面に幾筋もの小溝があり、その中より、小石・軽石・砂等が堆積していることから、流水による溝と思わ

れる。(羽毛田伸)

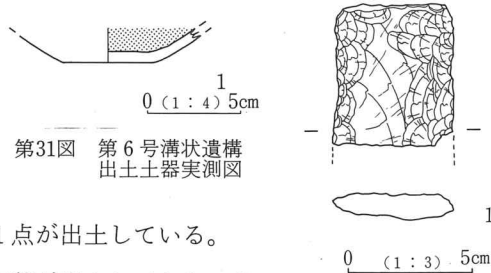
遺物 (第31・32図、図版十四)

M1・3号溝状遺構からは、遺物の出土がない。M2号溝状遺構からは、ローリングを受けた土師器小片5点が出土しており、M4号溝状遺構からは、鉄滓が1点と須恵器大甕の胴部破片1点が出土している。

M5号溝状遺構からは、土師器・須恵器・打製石斧が出土しており、そのうち打製石斧を図化した。土師器には、底部回転糸切りの坏片と、甕胴部破片が出土している。32-1の荒船玄武岩質の打製石斧は、刃部が欠損しているが、短冊型の形態を呈するものと思われる。

M6号溝状遺構からは、土師器・須恵器が出土しており、そのうち1点を図化した。31-1の坏は、内面黒色研磨されており、ロクロヨコナデが観察でき、底部は回転糸切により成形されている。

以上、溝状遺構からの出土遺物は、ローリングを受けているため、流れ込みによる遺物と考えられ、これら遺構の所産期を位置づけることはできない。(高村)



第31図 第6号溝状遺構出土土器実測図

第32図 第5号溝状遺構出土土器実測図

第9表 第6号溝状遺構出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
31-1	坏	— (1.8) (3.6)		内) 黒色研磨 外) ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	回転実測B

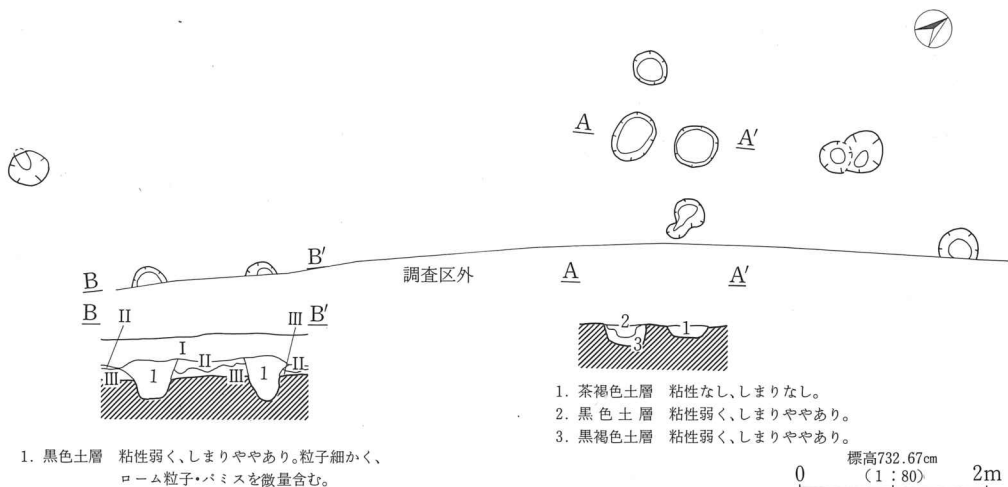
第6節 ピット群及び区出土遺物

1) ピット群

遺構・遺物 (第33図)

本遺跡調査区の南側A区よりピットが10個検出され、これをピット群とした。土層断面より全体層序第II層暗褐色土層より構築されていることが確認された。平面形態は円形がほとんどで、径40cm前後、深さ14~50cmを測る。これらのピットは覆土により2種類に大別でき、新旧関係はその重複関係から茶褐色土の覆土を持つピット(4個)が新しく、黒色土を基調とするピット(6個)が古いものであることが確認された。

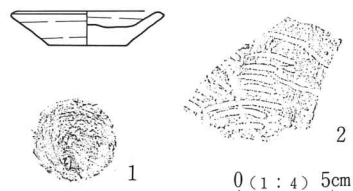
それぞれのピットからの遺物の出土はなく、配列を観察しても規則性は認められず、東側調査区外にも同様なピットの存在が予想されるが、その所産期及び性格は判然としない。(三石)



第33図 ピット群実測図

2) 区出土遺物 (第34・35図, 図版十四)

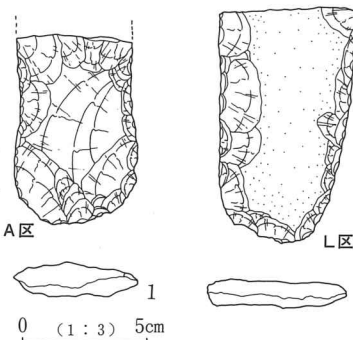
本遺跡の区出土遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・中世以降の陶磁器、石器類として打製石斧・黒曜石の原石が出土している。このうち土器が2点、石器2点を図化した。



第34図 区出土土器実測図及び拓影図

34-1の土師質土器小皿は、L区より出土し、器高低く、短かい口辺が直線的に外傾する器形で内外面ロクロヨコナデにより調整されている中世の土器である。底部は、回転糸切り痕が明瞭に残っている。

34-2の素焼きの土器は、K区と第1号堅穴状遺構から出土したもので、焼成良く、中世土器的な固い胎土であるが、表面に綾杉状の文様が施されており、佐久地方では例がなく、器形・時代とも不明である。



第35図 区出土石器実測図

35-1の打製石斧は、A区より出土した荒船玄武岩質の石器で刃部の使用痕跡は見られない。

35-2の打製石斧は、L区より出土しており、35-1と同

第10表 L区出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調 整	備 考
34-1	土師質土器小皿	(7.4) 1.8 (4.2)	器高低く、短かい口辺が直線的に外傾する。	内外面ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	回転実測B L区

様、石質は荒船玄武岩で、刃部方向にやや狭まる形態を呈している。

中世以降の遺物は、A・B・I・J・L区より陶器が出土しており、J区からは常滑片が1点存在する。また、平安時代と考えられる灰釉陶器は、A・M区より出土している。

その他、K区より瓦器と思われる土器片が検出されており、概むね、古墳時代～中世の遺物と考えられる。

(高村)

第V章 調査のまとめ

今回、芝間遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、堅穴住居址4棟、特殊遺構1基、堅穴状遺構1基、土坑5基、溝状遺構6基、ピット群などがある。

一方、出土遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器、鉄製品、炭化米等がある。

以下、今回の調査において検出された遺構・遺物を中心としてまとめを行っていきたい。

第1節 遺 構

芝間遺跡において、古墳時代後期の住居址1棟(第1号住居址)、平安時代の住居址3棟(第2・3・4号住居址)が検出された。今回実施された調査は、道路の拡幅工事のため約5mという限られた範囲であるため、台地上における遺構の分布等を把握するには至らなかったが、調査区内における住居址の分布状態は、古墳時代の住居址は調査区内南端部、平安時代の住居址は調査区内北半部に偏在する傾向が認められた。このことから明確ではないが、古墳時代の集落は調査区の西・南側に存在し、さらに平安時代の集落は、西・北側の微高地上に展開していることが予想される。

住居址の形態及び規模については、道路幅のみの調査であるため3棟(第1・3・4号住居址)は全プランが確認されず、1棟(第2号住居址)は攪乱により床面まで破壊されているため明確ではないが、古墳時代の住居址は、一辺6mの前後を測る隅丸方形か隅丸長方形を主とするものと考えられ、平安時代の住居址は、一辺3m前後と古墳時代の住居址と比較すると小型の隅丸長方形となり、時期によって平面プランの変化がうかがえる。

覆土は、黒褐色土と茶褐色土を基調としており、第3号住居址の一部が人為堆積と思われる他

第11表 住居址一覧表

遺 構	検出位置 (区)	平面プラン 及び 長軸方位	壁 残 高 (cm)	付 属 施 設	時 期	備 考
1住	A区		42~61	カマド位置北壁 カマド主軸方位N-8°-W	古 墳	東南部の大半が調査区外
2住	F・G区	隅丸長方形 南北333cm東西260cm 長軸方位N-10°-W	0~8.5	カマド位置北壁中央 カマド主軸は北 ピット10?	平 安	北壁長 (280cm) 南壁長 (240cm) 東壁長 (337cm) 西壁長 (321cm)
3住	H・I区		21~30	カマド位置東壁 カマド主軸方位N-84°-E	平 安	西側の大部分が調査区外
4住	I区	隅丸長方形 南北314cm東西270cm 長軸方位N-3.5°-E	12~29.5	カマド位置東壁南寄り カマド主軸は東 南壁中央にピット1	平 安	北壁長 (265cm) 南壁長 (275cm) 東壁長 (324cm) 西壁長 (305cm)

は自然堆積と考えられる。

次にカマドについては、第1号住居址は北壁中央に位置すると考えられ、袖部は黄褐色ローム層を主体として、これに黒褐色土を被覆し火床両サイドに扁平な石を配して構築される。一方、第2号住居址は北壁中央、第3・4号住居址が東壁中央付近に位置する。特に第3号住居址より検出されたカマドは遺存状態が非常に良好で、煙道部・天井部の一部が欠損しているのみで、ほぼ往時のまま残存している。天井部と袖部には直方体に加工の施された安山岩が用いられ、支脚石には、円柱状に加工された軽石が2個検出された。このように支脚石が2個検出された例として兵士山H1号住居址¹⁾、鑄師屋H1号住居址²⁾等がみられる。これらのことから、当カマドは、今後、佐久地方のカマド構造等を知るうえで貴重な資料であるといえよう。次にカマドの構築位置について現在まで検出されたカマドを概観すると、北壁に集中する傾向が認められる。特に古墳時代～奈良時代においては9割以上が北壁にカマドが設けられている。一方、平安時代においても北壁に構築されるものが多いものの、約7割と古墳時代後期から奈良時代と比較すると減少し、東壁や東壁南方隅に設けられる例が増加する傾向が看取される³⁾。

堅穴状遺構について

調査区北端部より、平安時代以降の所産であると考えられる堅穴状遺構が1基（第1号堅穴状遺構）検出された。東半部が調査区外であるため遺構の全容は把握できなかったが、平面形態は隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと考えられる。従来、堅穴状遺構は不明瞭であったが、佐久市大井城跡（黒岩城⁴⁾）・同石堂遺跡⁵⁾・同前田遺跡⁶⁾・御代田町野火付遺跡⁷⁾より明確な堅穴状遺構が検出されている。本遺跡の南西約12kmの台地上に所在する大井城跡（黒岩城）では14～16世紀の堅穴状遺構53基が検出され、また、西方約700mに所在する六供後遺跡⁸⁾では、大井城に関わると思われる溝状遺構が検出されている。本遺跡より検出された堅穴状遺構も、今後、該期の堅穴状遺構を考究するうえで良好な資料であろう。（三石）

第2節 遺物

芝間遺跡において検出された4棟の住居址のうち、第1号住居址は古墳時代後期に比定される遺物を出土している。第1号住の土器の器種としては、土師器として長胴甕・鉢・小形甕・高坏・埴・坏があり、須恵器として坏がある。さらに、石器として滑石製の白玉が出土している。

土師器坏は、1点のみの出土であるが、高坏の坏部を含めて、鬼高期のメルクマールの坏形態である稜を有したものがなく、次期につながる形態と思われる。土師器の長胴甕においても、最大径を口縁部に有し、胴部のふくらみがほとんどない形態であり、古墳時代後期でも新しい時期のものと考えられる。

平安時代の住居址として第2～4号住居址がある。これら、第2～4号住の出土土器の器種別個体数は、土師器として薄手長胴甕3個体、小形甕2個体、坏8個体、蓋1個体があり、須恵器として坏6個体、蓋1個体、長頸瓶1個体となる。

土師器長胴甕及び小形甕は、薄手で赤褐色の胎土であり、所謂武蔵型甕の系統の甕と思われ、口縁部から胴部上半ロクロヨコナデ、その下半はヘラケズリにより調整される北陸系の甕の存在はなかった。これらの甕形土器は、いずれも口縁部「コ」の字状を呈し特徴的な形態を呈している。

土師器坏は、すべてロクロヨコナデにより調整されており、底部の成形も15—4の回転糸切りによるものを除きすべてヘラケズリによりなされている。また、8個体中3個体が墨書土器であり、この時期に墨書土器が多く見られることも特徴の1つと言えよう。さらに、内面黒色研磨も、すべての土師器坏になされている。

須恵器坏は、すべて底部回転糸切りのまま未調整であり、口径と底径の比は、その判明するものだけであるが、15—7が2.17、18—7が2.13、18—8が2.23、18—9が2.62となり、口径が底径の2倍以上となっている。このことから、これら須恵器坏は新しい時期の様相を呈しているものと言える。

また、野火付遺跡で9世紀前葉とされたH9～16号住居址の土師器坏と須恵器坏の出土の比率は、須恵器坏の量が多く、本遺跡では土師器坏の出土量が増加しており、このことは、時間差によるものか、地域差なのか、今後資料の増加を待って検討してゆきたい。

以上、平安時代の土器を中心に記述してきたが、近年、発掘調査の増加にともない、奈良時代から平安時代の資料が豊富になってきており、今後、佐久地方の該期の編年作業に際し、第2～4号住居址の出土土器も良好な資料となるものと考えられる。(高村)

註1 1979年12月に佐久市教育委員会によって調査された。

註2 佐久市教育委員会 1985 『铸師屋遺跡』

註3 小山岳夫 1984 「佐久平におけるカマドについて」 佐久市教育委員会 『若宮遺跡』

註4 1984年5月～12月に佐久市教育委員会によって調査された。

註5 1984年5月に佐久市教育委員会によって調査された。

註6 1986年4月～9月に佐久市教育委員会によって調査された。

註7 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』

註8 佐久市教育委員会 1981 『六供後遺跡』

引用参考文献

- 福田健司 1978 「南武蔵における奈良時代の土器編年とその史的背影」『考古学雑誌64—3』
- 神奈川考古学同人会 1978 「シンポジウム神奈川県内における古墳時代後期から平安時代土器
編年試論」 『神奈川考古第5号』
- 佐久市教育委員会 1981 『六供後遺跡』
- 神奈川考古同人会 1983 「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の様
相—」 『神奈川考古第14号』
- 佐久市教育委員会 1984 『若宮遺跡』
1985 『鑄師屋遺跡』
- 御代田町教育委員会 1985 『野火付遺跡』
- 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1986 『西裏・竹田峯』
1986 『池畑・西御堂』

芝間遺跡及び下川原・光明寺遺跡より出土した 炭化米粒の形態について

信州大学農学部

農学博士 氏原暉男

今回の発掘によって両遺跡から出土した植物遺体は炭化米粒のみであり、他のものは発見されなかった。

幸い、炭化米は小数ではあったが、ほぼ完全に原形をとどめていた。

芝間遺跡から十粒、下川原・光明寺遺跡から十二粒が出土し、形状は第1・2図の写真で示したとおりであり、一見して、芝間遺跡の方が短粒であることがわかる。

炭化米の粒の形状や、遺跡別の粒型の変異を知ることは、当時の稲の品種の実態を推測する上で重要なことである。勿論、日本の稲の品種の最古の記録は万葉時代で、その当時、早生稲（わせ）、晩稲（おしね）など、熟期の違いによって区別がなされている。従って、両遺跡ともに、それ以降なので、品種としての区別はなされていたものと推定することが出来る。早・晩性のみでなく、粒の形や大小も区別の対象になっていたに違いない。

ここでは、出土炭化米をオリンパスの万能投影機で拡大して、粒長・粒幅共に最大部分を測定し、若干の解析を行った。

(1) 芝間遺跡

出土した全粒について計測したところ、長さの平均は4.31mmで、最長が4.8mm、最短が4.0mmであり、また、粒幅は平均が2.61mmで、最長が2.8mm、最短が2.4mmの値を示した。

長・幅の比（長／幅）の平均は1.65であり、岡谷の橋原遺跡の同時代の値が1.63～1.67であり本遺跡の値とほぼ一致する（第3図参照）。しかし、粒幅はやや長く、岡谷地方の品種群とは若干異なっていたものと推定される。

(2) 下川原・光明寺遺跡



第1図 芝間遺跡第2号住居址
出土炭化米



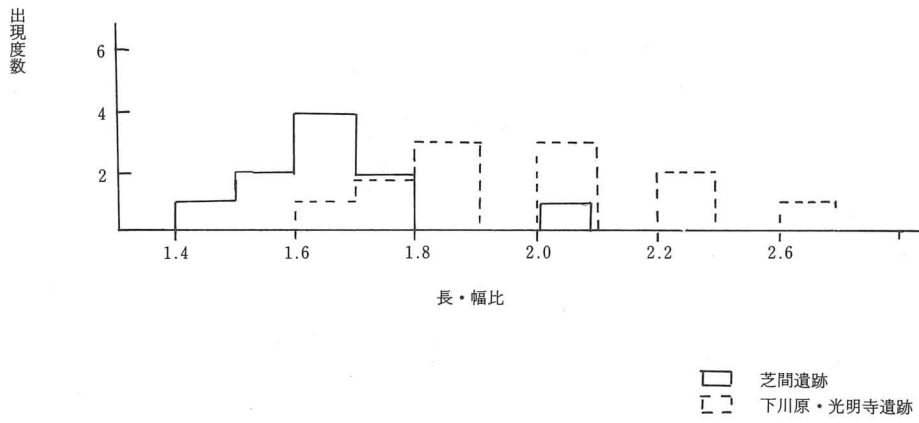
第2図 下川原・光明寺遺跡D1号
土坑出土炭化米

第1表 芝間遺跡第2号住居址出土炭化米粒一覧表

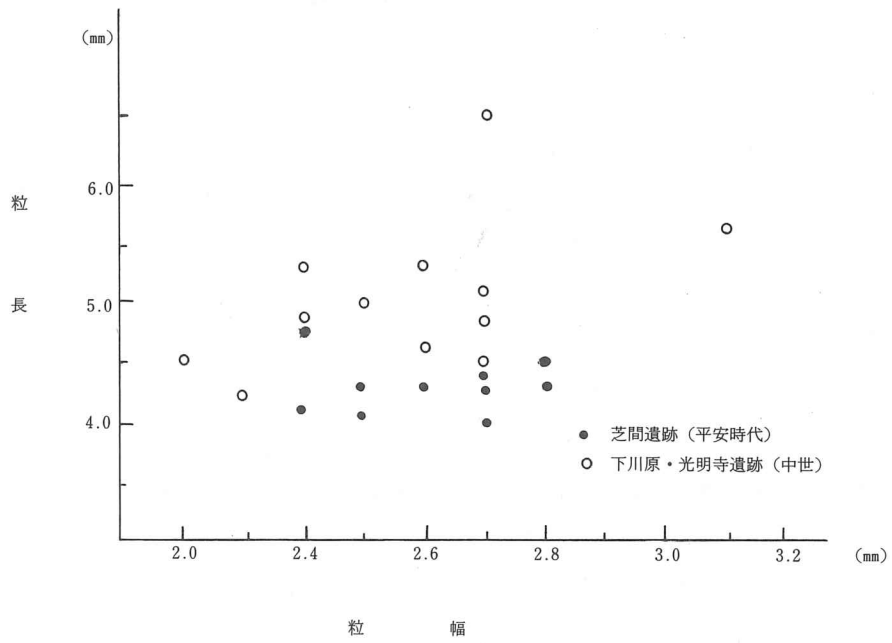
NO	長 さ	幅 長	幅 比
1	430	280	1.536
2	410	240	1.708
3	440	270	1.630
4	430	250	1.720
5	450	280	1.607
6	410	250	1.640
7	430	260	1.654
8	430	270	1.593
9	480	240	2.000
10	400	270	1.481
MEAN	431	261	1.657
MAX	480	280	2.000
MIN	400	240	1.481

第2表 下川原・光明寺遺跡D1号土坑出土炭化米粒一覧表

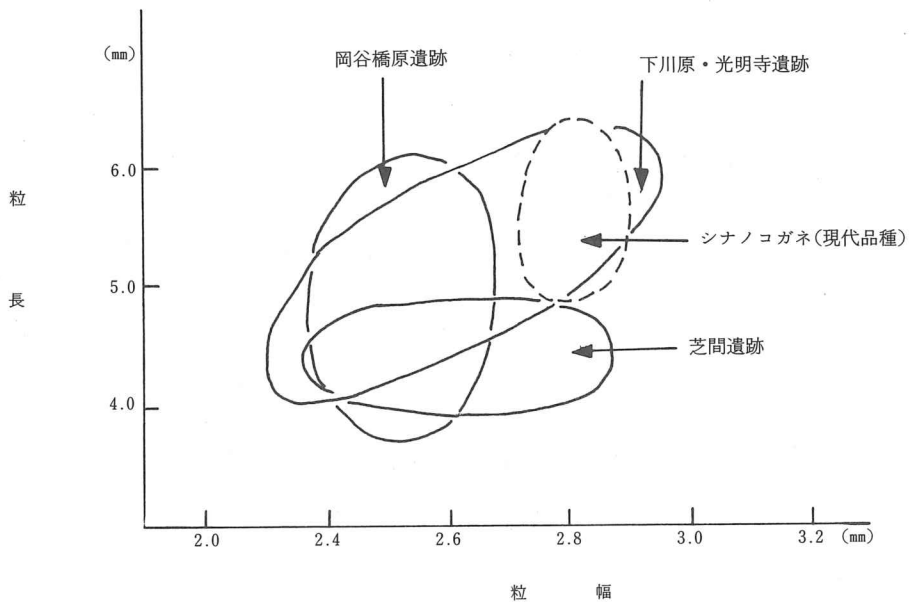
NO	長 さ	幅 長	幅 比
1	650	270	2.407
2	510	270	1.889
3	500	250	2.000
4	560	310	1.806
5	450	200	2.250
6	480	240	2.000
7	420	230	1.826
8	530	240	2.208
9	530	260	2.038
10	480	270	1.778
11	460	260	1.769
12	450	270	1.667
MEAN	502	256	1.970
MAX	650	310	2.407
MIN	420	200	1.667



第3図 出土炭化米粒の長・幅比の分布



第4図 出土炭化米粒の長・幅の相関関係



第5図 遺跡別出土炭化米粒の長・幅の相関関係

中世の下川原・光明寺遺跡から出土した炭化米の長・幅の値は、粒長の平均が5.02mmで、最大が6.50mm、最小が4.20mmで、長さにかなり変異が認められた。

また、粒幅は平均が2.56mm、最長が3.1mm、最短が2.0mmで、平安時代の米粒にくらべ、長幅比も1.96と高い値を示し、明らかに長粒であることがわかった。(第3図)

(3) 出土炭化米粒の長・幅の関係

粒の形態を表現する方法として、第4図で示したような長・幅の相関図として表わすと、一見して様相を把握することが出来る。この図から明らかなように両遺跡の違いは明確で、平安時代のものは比較的小粒で短粒であることがわかる。

また、第5図は前述の岡谷橋原遺跡から出土した平安時代の形状と、現代品種である「シナノコガネ」を比較したものであるが、両遺跡ともに岡谷のものとは明らかに異なり、また、粒形の変異の幅も広く、相当雑ばくな粒形の集団であったことがうかがわれ、粒形からみた稲品種の時代や地域による変遷の一端を知ることが出来た。

いづれにしても、出土点数は少なく、明確な結論を出すことはむづかしいが、出土炭化米がほぼ原形をとどめていたことから、一応の推測を行うことが出来、当時の農耕の一端を知る上での貴重な資料と考えられる。

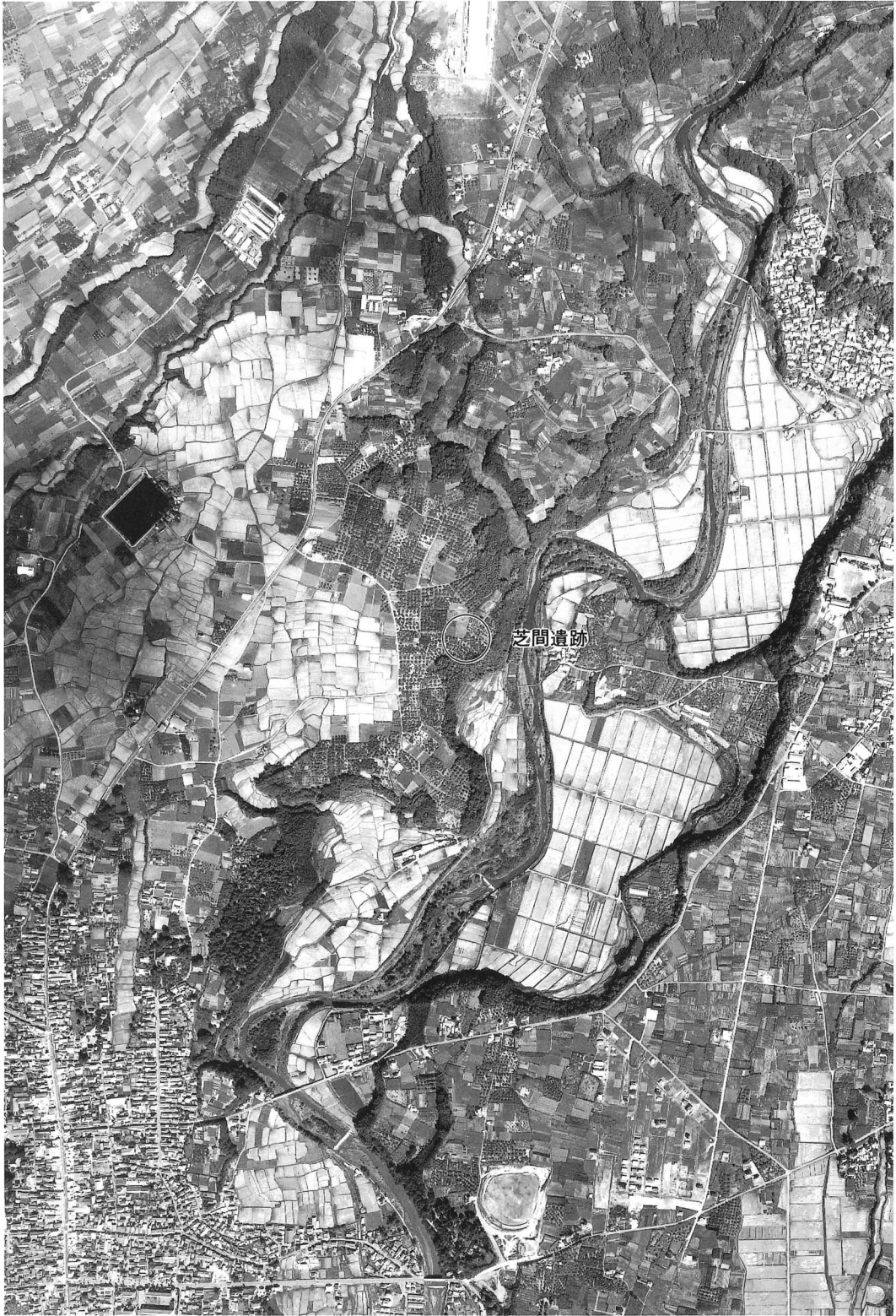
後 記

今回、佐久市土木課が行う60年度市道芝間線道路改良事業として、本遺跡を南北に縦断している市道の拡幅工事の計画がなされ、これに伴う緊急発掘調査を行うことになりました。

本調査において、調査団の編成から調査各段階において御配慮をいただいた、佐久市教育委員会・地元区長さんをはじめ、リンゴ園経営者の皆様がリンゴ収穫時期直前の調査に対して深い御理解と御援助によって調査を充実したものにすることが出来たことを心から御礼申し上げます。又、秋の収穫最盛期の中を現地調査に続いて整理調査にと参加して下さった協力者の皆様の熱意と御協力により、ここに報告書を発行できることを改めて感謝の意を表する次第です。

芝間遺跡は栗毛坂遺跡群に属し埋蔵文化財の分布が多く重要な遺跡です。本調査は、市道拡幅工事に伴う緊急調査のため、幅5mという限られた範囲のため芝間遺跡のほんの一部であり調査対象面積も小さかったために、検出遺構は古墳時代住居址1棟・平安時代住居址3棟・中世竪穴状遺構1基・時代不明溝状遺構4基・馬いれ道跡4基等であった。が、その所在分布をみると、北区に平安時代の住居址3棟が検出され、これらの住居址は調査区の西側にのびており西側に続く微高地には平安時代の集落の展開が予想され、南区においては古墳時代の住居址が1棟検出され調査区の西南部で該期の土器が表採され古墳期の集落存在が予想されます。本調査で特筆すべきは、H3号住居址のカマドとT a-1 竪穴状遺構があげられます。当カマドは佐久地方より検出される平安時代のカマドの構造等を考究するうえで貴重な資料であるといえましょう。またK区より検出された竪穴状遺構は中世の所産であると考えられ他遺跡との関連も考慮しながら芝間遺跡及び栗毛坂遺跡群解明の責任を感じました。その意味からも今後、更に各位の御指導を賜わり、本報告書を総合研究調査の足掛りとしたい所存です。

(黒岩忠男)



栗毛坂遺跡群芝間遺跡付近航空写真(東洋航空事業株式会社撮影C 5-11)



1. 芝間遺跡遠景（東方より）



2. 芝間遺跡遠景（南方より）



1. 第1号住居址（南方より）



2. 第1号住居址カマド（南方より）



3. 第1号住居址カマド（南方より）



4. 第1号住居址遺物出土状況（南方より）



5. 第1号住居址遺物出土状況（南方より）



1. 第1号住居址遺物出土状況（南方より）



2. 第1号住居址遺物出土状況（北方より）



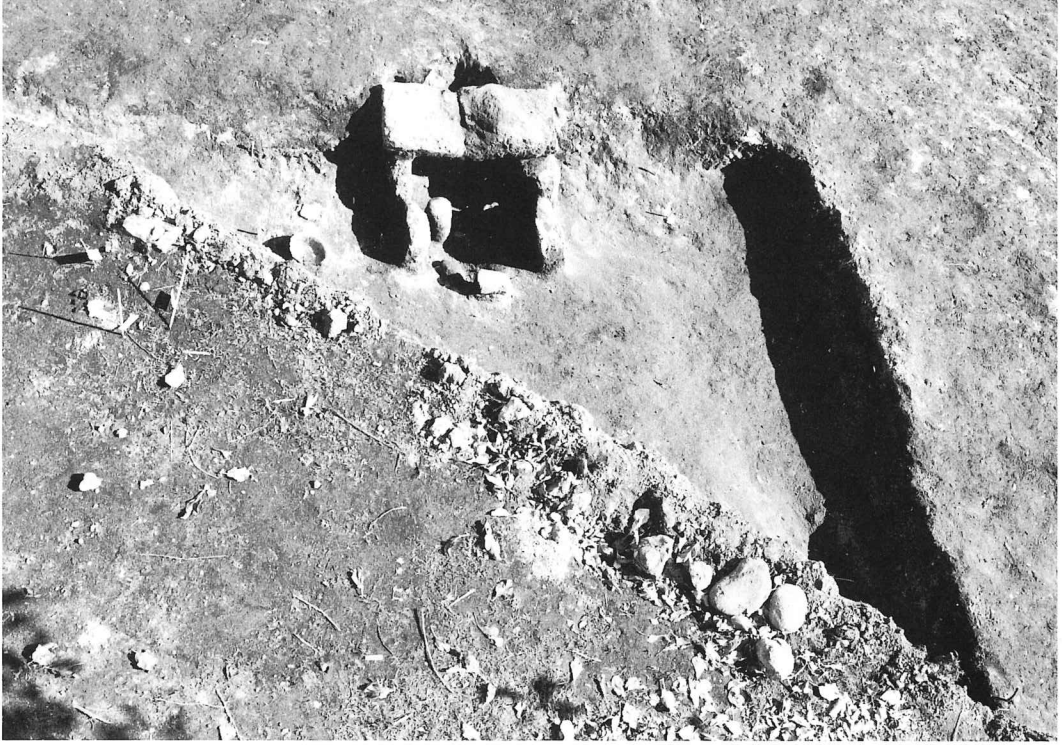
3. 第2号住居址（南西より）



4. 第2号住居址カマド（南方より）



5. 第2号住居址遺物出土状況（北方より）



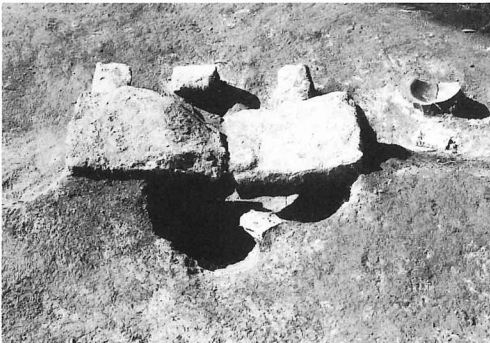
1. 第3号住居址（西方より）



2. 第3号住居址カマド（西方より）



3. 第3号住居址カマド（南方より）



4. 第3号住居址カマド（東方より）



5. 第3号住居址カマド（南方より）



1. 第3号住居址カマド（西方より）



2. 第3号住居址遺物出土状況（北西より）



3. 第3号住居址遺物出土状況（西方より）



4. 第3号住居址遺物出土状況（東方より）



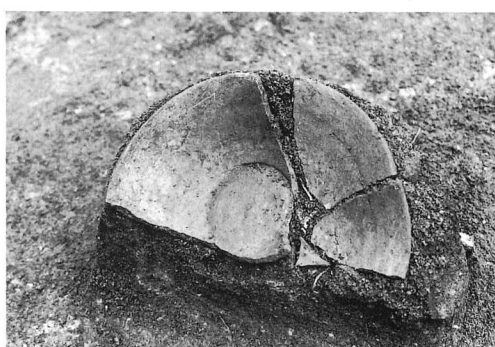
5. 第3号住居址（西方より）



1. 第4号住居址（西方より）



2. 第4号住居址カマド（西方より）



3. 第4号住居址遺物出土状況（南西より）



4. 第4号住居址遺物出土状況（北方より）



5. 第4号住居址遺物出土状況（北方より）



1. 第1号特殊遺構 (南方より)



2. 第1号特殊遺構炭化物出土状況 (東方より)



3. 第1号特殊遺構遺物出土状況 (西方より)



4. 第1号竪穴状遺構 (南方より)



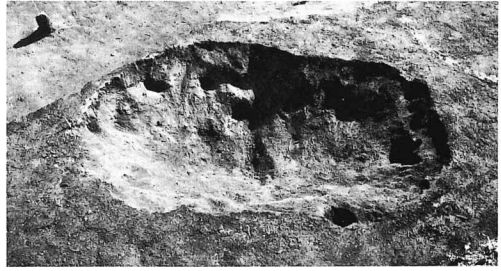
5. 第1号竪穴状遺構遺物出土状況 (南方より)



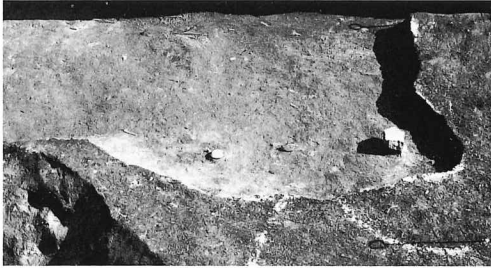
6. 第1号竪穴状遺構遺物出土状況 (南方より)



1. 第3号溝状遺構（南方より）



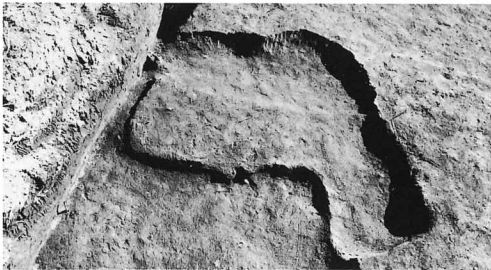
2. 第2号土坑（北西より）



3. 第3号土坑（西方より）



4. 第3号土坑遺物出土状況（東方より）



5. 第4号土坑（北方より）



6. 第5号土坑（西方より）



7. 第1号竪穴状遺構・第2～5号土坑（南方より）



1. E・F区全景 (北方より)



2. G・H・I区全景 (北方より)



1. 第1号住居址出土土器

9-1



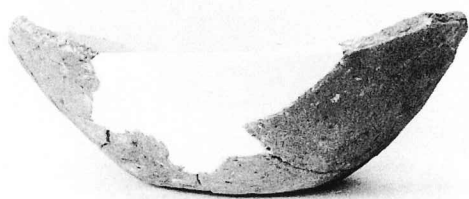
4. 第1号住居址出土土器

9-4



5. 第1号住居址出土土器

9-5



2. 第1号住居址出土土器

9-2



6. 第1号住居址出土土器

9-6



3. 第1号住居址出土土器

9-3



7. 第1号住居址出土土器

9-7



12-2

1. 第2号住居址出土土器



15-4

5. 第3号住居址出土土器



15-1

2. 第3号住居址出土土器



15-5

6. 第3号住居址出土土器



15-6

7. 第3号住居址出土土器



15-7

8. 第3号住居址出土土器



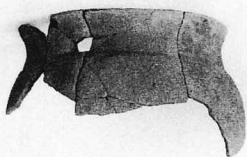
15-2

3. 第3号住居址出土土器



18-3

9. 第4号住居址出土土器



15-3

4. 第3号住居址出土土器



18-5

10. 第4号住居址出土土器



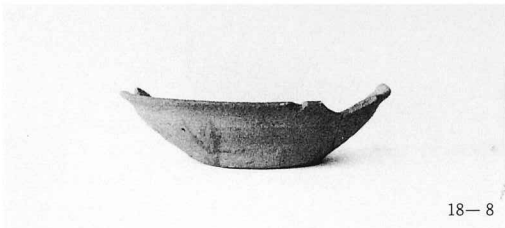
1. 第4号住居址出土土器

18-6



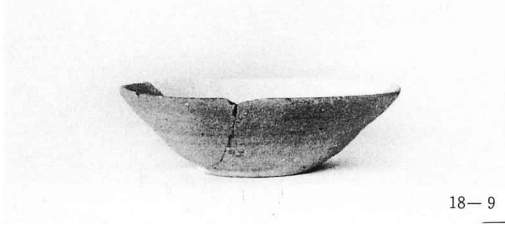
2. 第4号住居址出土土器

18-7



3. 第4号住居址出土土器

18-8



4. 第4号住居址出土土器

18-9



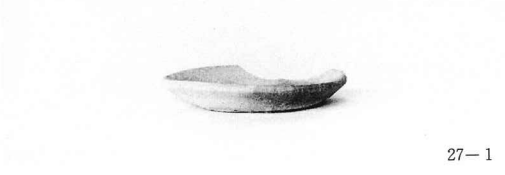
5. 第1号豎穴状遺構出土土器

24-1



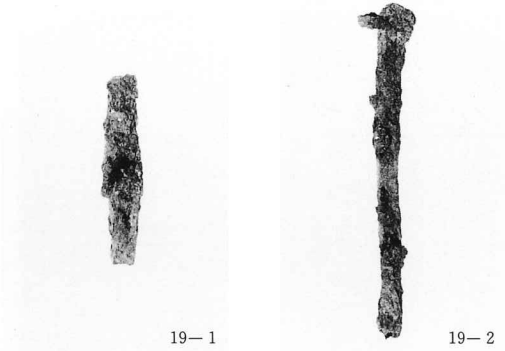
6. 第1号豎穴状遺構出土土器

24-2



7. 第3号土坑出土土器

27-1



8·9. 第4号住居址出土鉄器

19-1

19-2



10. 第1号特殊遺構出土鉄器

22-1



9-9

1. 第1号住居址出土白玉



34-2



34-1



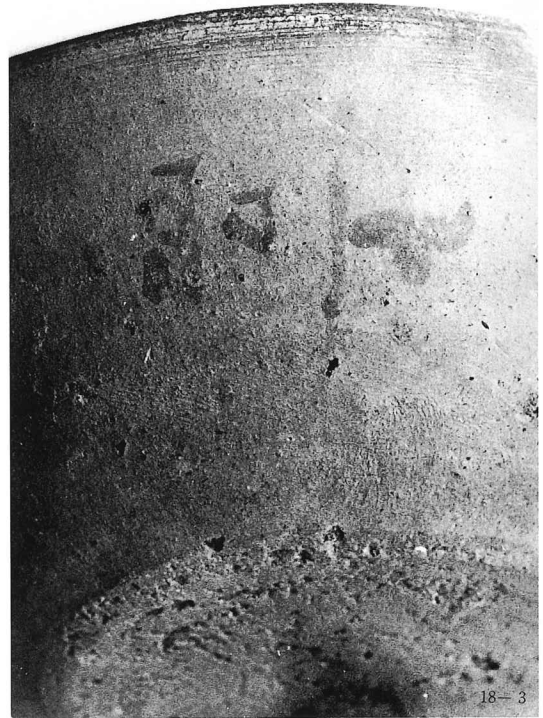
32-1

2. 芝間遺跡出土打製石斧



15-4

3. 第3号住居址出土墨書土器



18-3

4. 第4号住居址出土墨書土器



1. 発掘調査スナップ



2. 発掘調査スナップ



3. 発掘調査スナップ



4. 発掘調査スナップ



5. 芝間遺跡発掘調査団

長野県佐久市

栗毛坂遺跡群 芝間遺跡

1986年11月

編集者 佐久埋蔵文化財調査センター

発行者 長野県佐久市教育委員会

印刷所 株式会社 佐久印刷所
